

書籍版『日蓮宗事典』 画像

《書籍版巻頭》

とびら

口 絵

序 文	日蓮宗管長	日 威
刊行の辞	宗務総長	塩田義朗
編纂の辞	編集主幹	宮崎英修
目 次		
凡 例		

《書籍版末》

刊行委員会・編集委員会

執筆者・資料提供

編集後記 編集室主任 宮川了篤

仏塔の諸形態

日蓮宗の宗章とその描き方

奥 付（初版・復刻版）

日蓮宗諸門流系図

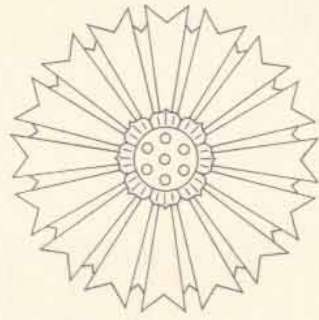
以上を収録

管長歴世、宗務総監・宗務総長、立正大学歴代学長・理事長は書籍版刊行以降の歴世・歴代を加筆したものを「事典（日蓮宗 wiki）」付属資料に収録しました。

歴代譜（歴代譜凡例、祖山・霊跡・由緒寺院歴代譜、各派本山歴代譜、檀林歴代譜）の画像は「事典（日蓮宗 wiki）」付属資料に収録し、本文データにも組み込みました。

日蓮聖人第七百遠忌記念

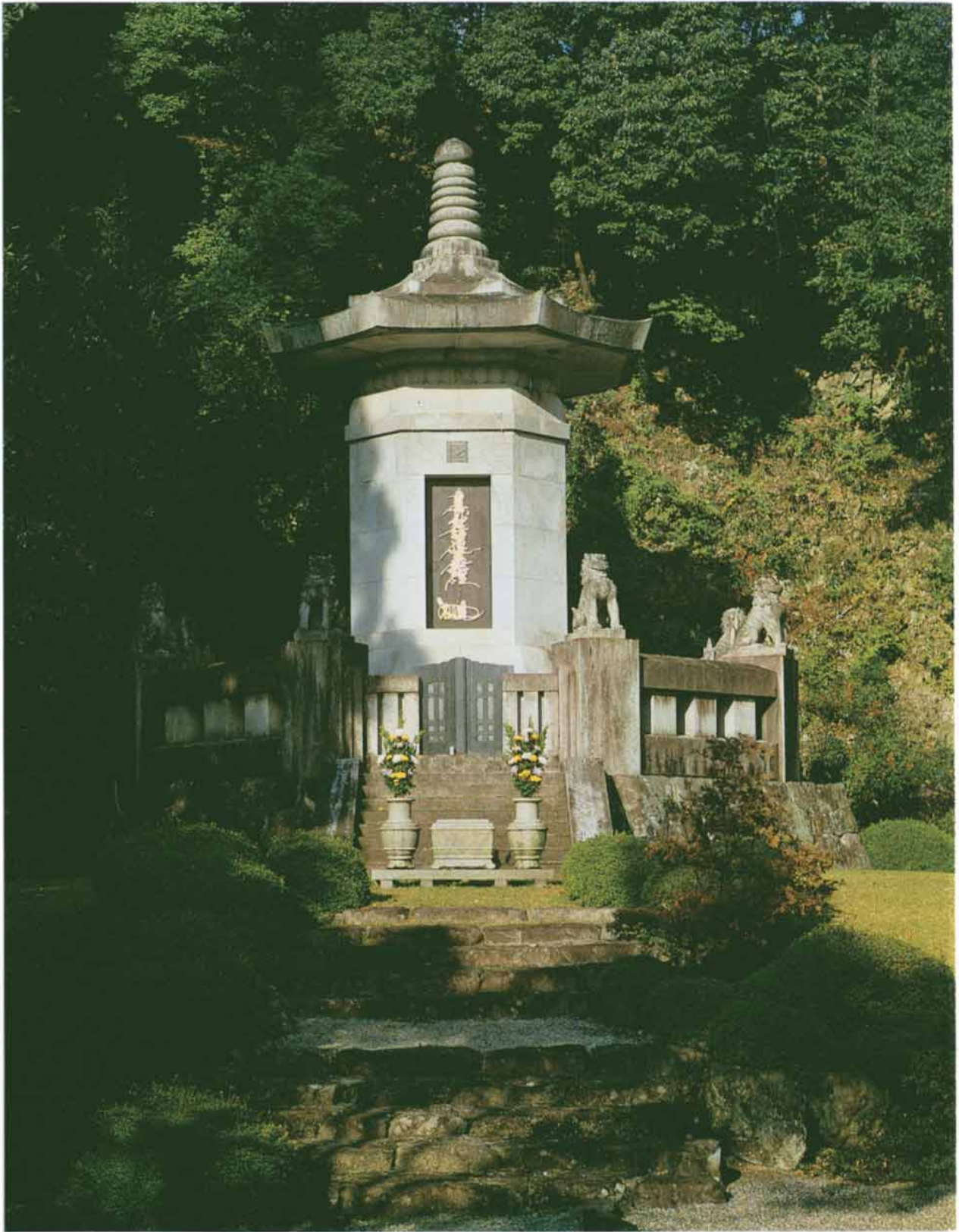
日蓮宗事典



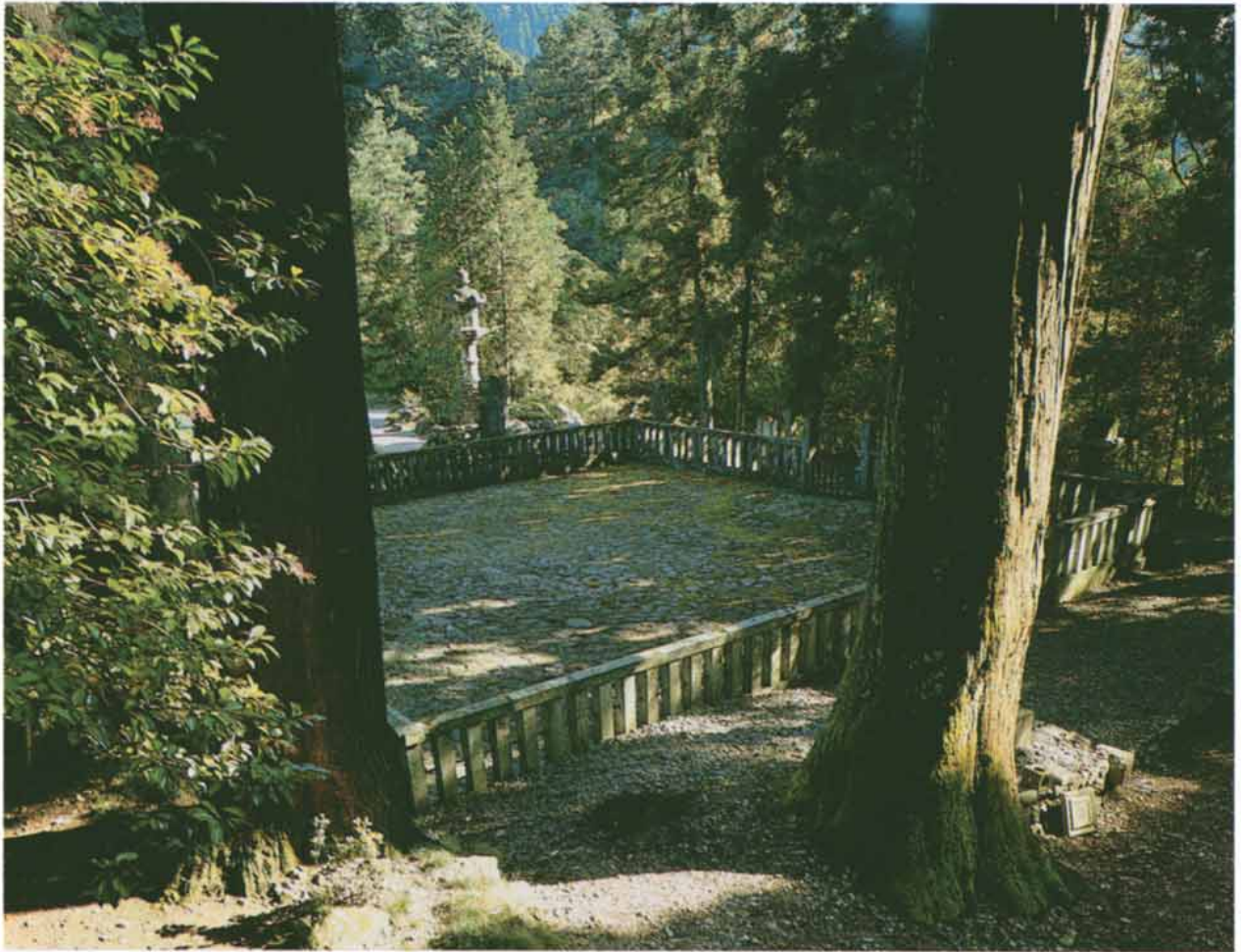
日蓮宗



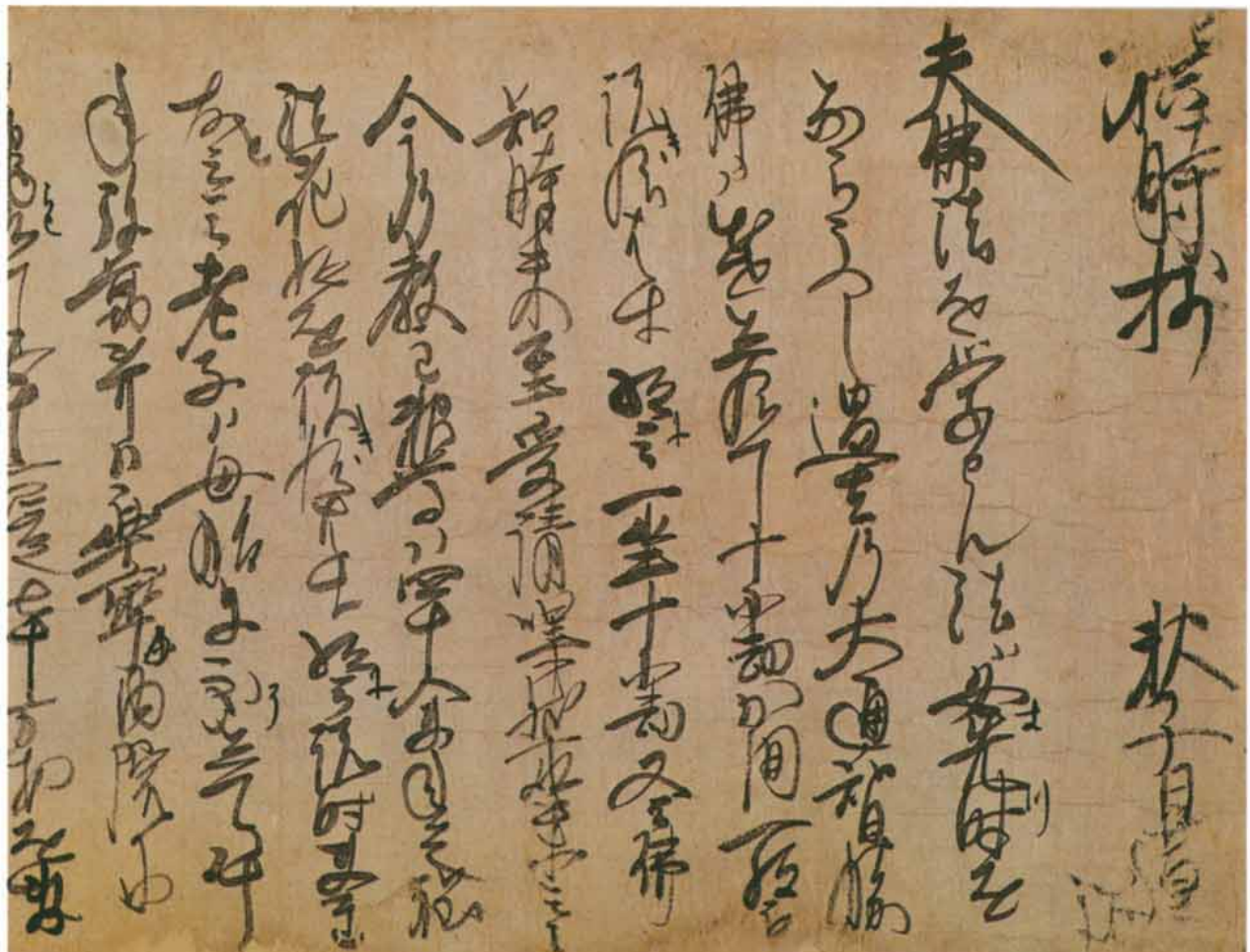
日蓮聖人水鏡の御影（重文・中山浄光院蔵）



日蓮聖人御廟所 (身延山西谷)



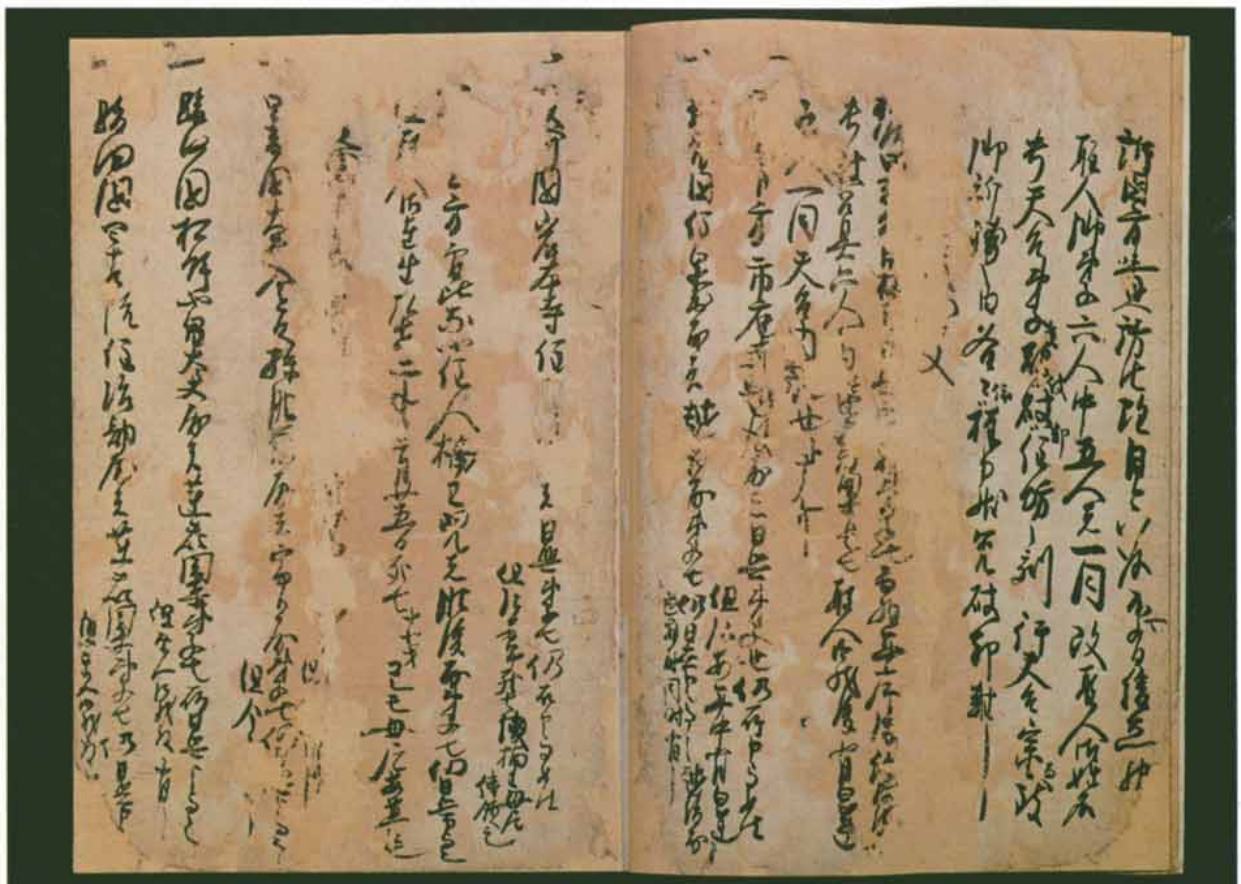
日蓮聖人御草庵跡（身延山西谷）



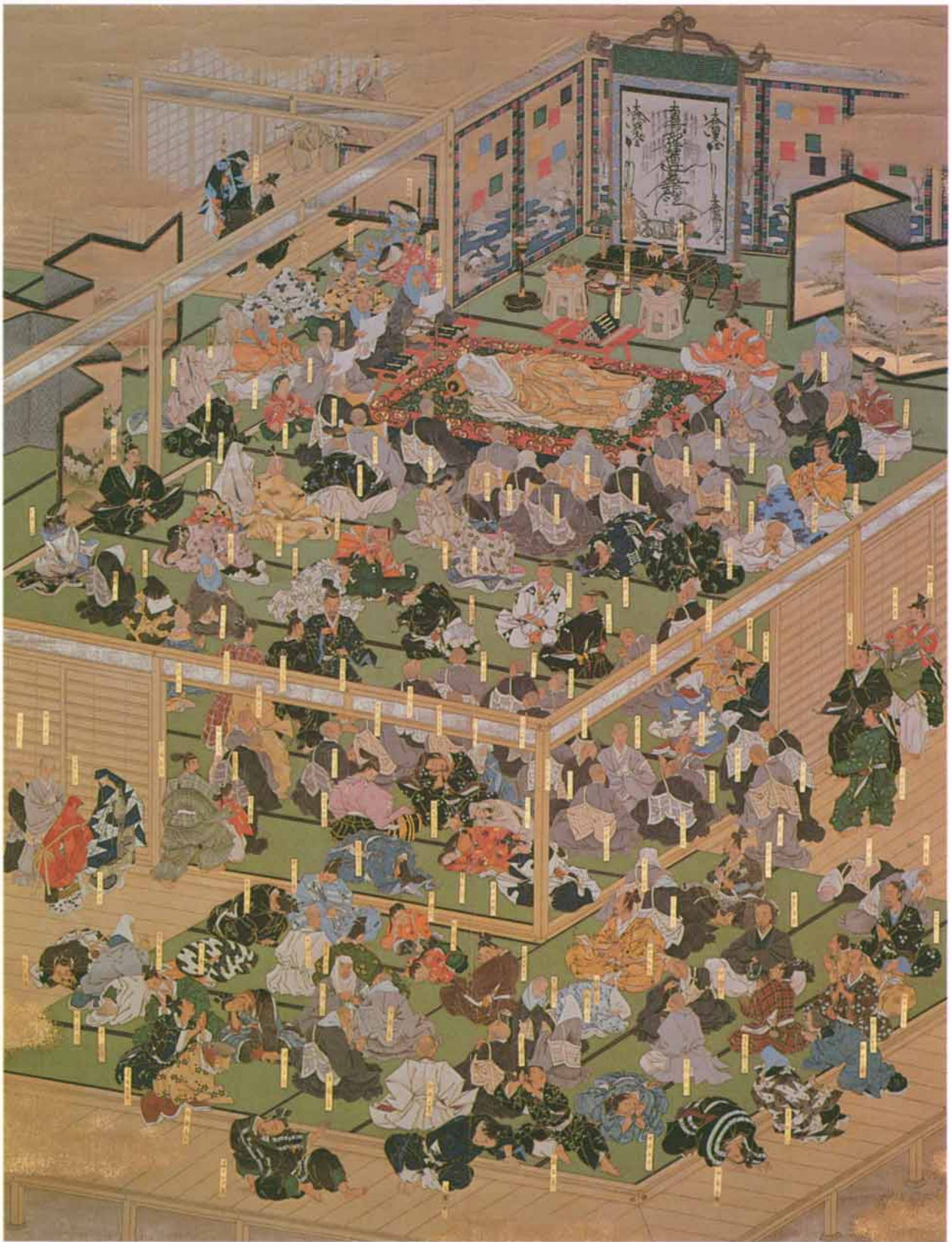
撰時抄（重文・玉沢妙法華寺蔵）



竜口法難 狩野探幽筆 (重文・京都本法寺蔵)



日興本尊分与帳 (北山本門寺蔵)



日蓮聖人涅槃図 (身延山久遠寺蔵)

信心法度事

一他宗より法の行いおぼろしくもあらず
 同作非なりと云りてせしむる事
 一其の心もまた信じてはなり同かり
 しかるやまらふ所の事たすす
 一南宗のりててててててててて
 宗にけりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 まんじりてててててててて
 同にけりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 まんじりてててててててて
 たまのりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 まんじりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 まんじりてててててててて

よまらんとすれりててててて
 其れに宗より三三三三三三三三
 一法花宗のりててててててて
 事とまらりててててててて
 同にけりてててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて
 一に宗のりてててててててて
 けりててててててててて



七面大明神像
中正院日護作
(鳴滝三宝寺蔵)

養珠院お万の方
(貞松蓮永寺蔵)





京都松ヶ崎「妙・法」送り火（8月16日・旧盆）



千体仏 中正院日護作（鳴滝三宝寺蔵）



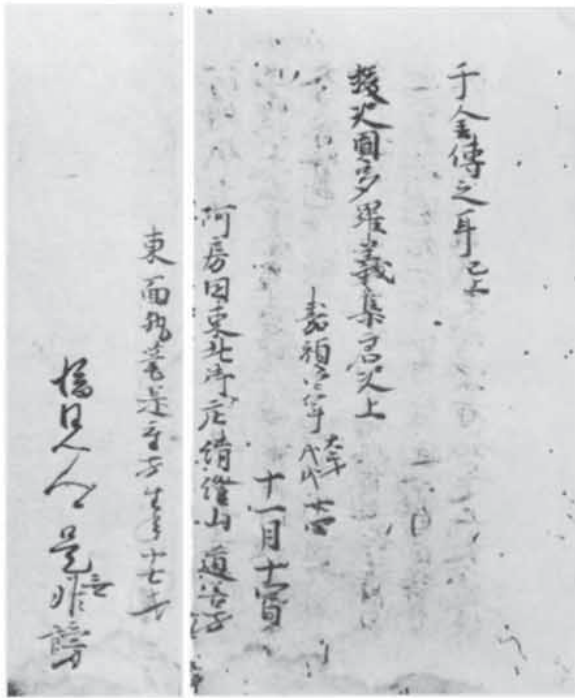
「立正」勅額 (身延山久遠寺藏)

妙法蓮華經序
 如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中與
 大比丘眾萬二千人俱皆是阿羅漢諸漏已
 盡無復煩惱逮得已利盡諸有結心得自在
 其名曰阿若孺陳如摩訶迦葉優樓頻螺迦
 葉伽耶迦葉那提迦葉舍利弗大目犍連摩
 訶迦旃延阿菟樓駄劫賓那憍梵波提離婆
 多畢度伽婆蹉薄拘羅摩訶拘絺羅難陀羅
 隨羅難陀富樓那伽多羅尼子須菩提阿難
 維摩羅如是眾所知識大阿羅漢寺復有學
 無學二千人摩訶波闍波提比丘尼與眷屬
 六千人俱羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼亦與
 眷屬俱菩薩摩訶薩八萬人皆求阿耨多羅
 三藐三菩提不退轉皆得陀羅尼樂說辯才
 轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛
 所殖眾德本常為諸佛之所稱歎以慈愍身
 善入佛慧通達大智到於彼岸名稱普聞無
 量世眾能度無數百千眾主其名曰文殊師
 利菩薩觀世音菩薩得大勢菩薩常精進菩
 薩不休息菩薩寶掌菩薩藥王菩薩勇施菩
 薩

注法華經 (重文・玉沢妙法華寺藏)



▲蓮華ヶ淵 (安房小湊)
▼授決円多羅義集唐決 奥書
(横浜市称名寺藏 金沢文庫保管)

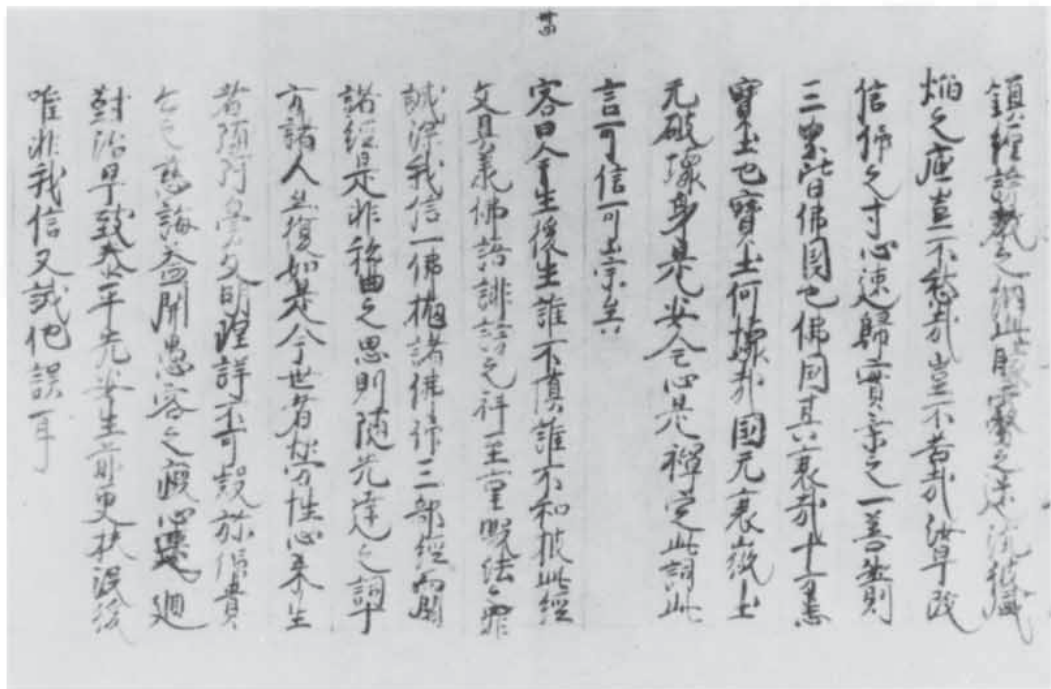


旭ヶ森 日蓮聖人銅像 (清澄山)

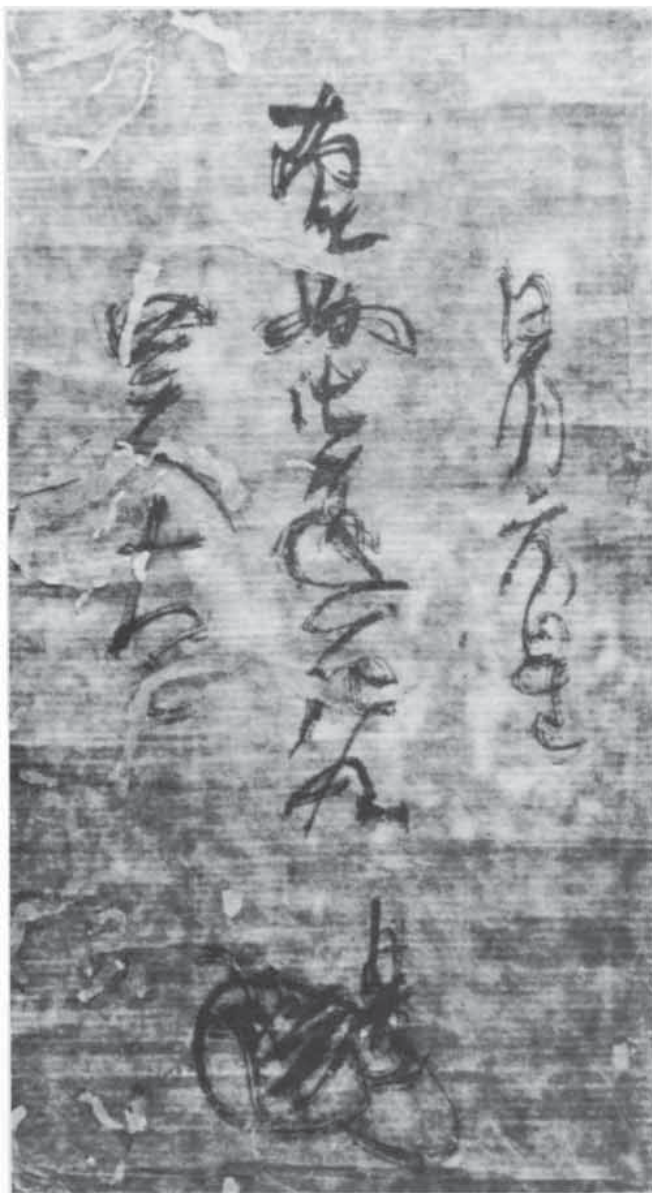


第二十四初圖本尊并前司狀
文永十年癸酉始立於本門三大秘法圖於本尊有文勇
陀羅給書曰千歳日蓮依竹不思識狀龍樹天觀天台傳教

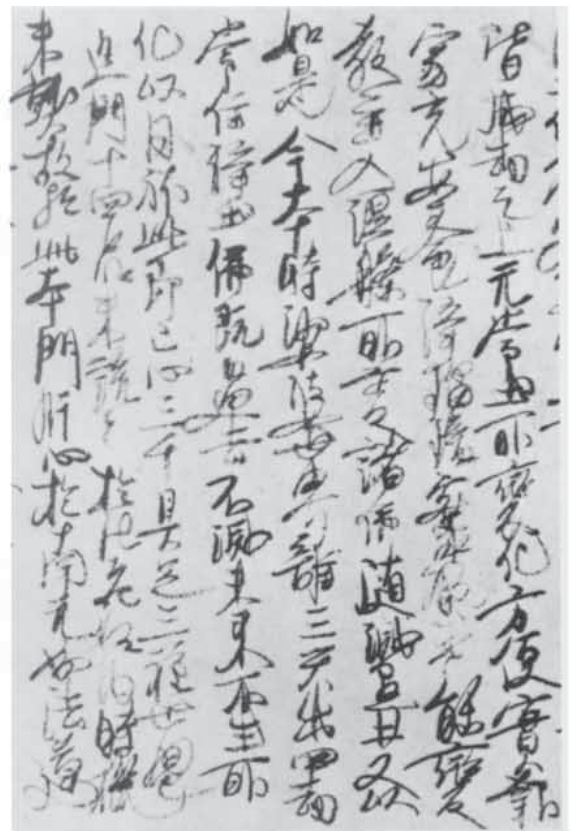
日蓮聖人註画讃 第二十四初圖本尊并前司狀 (旧国宝 京都本圀寺藏)



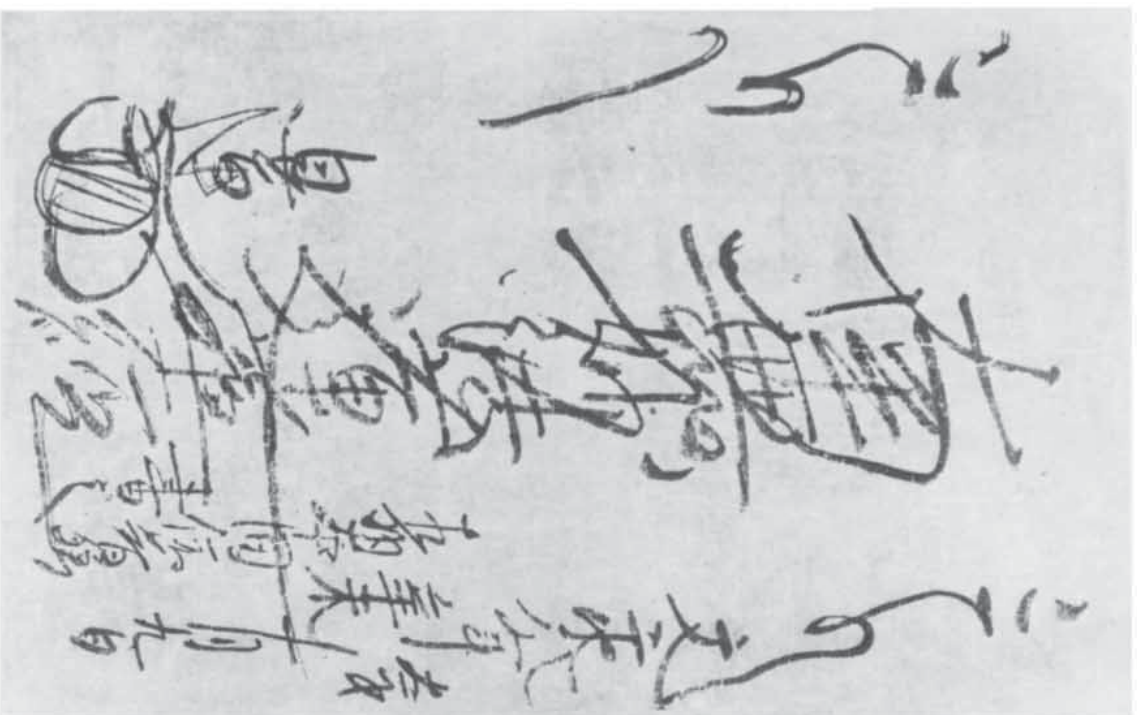
立正安国論 (国宝·中山法華經寺藏)



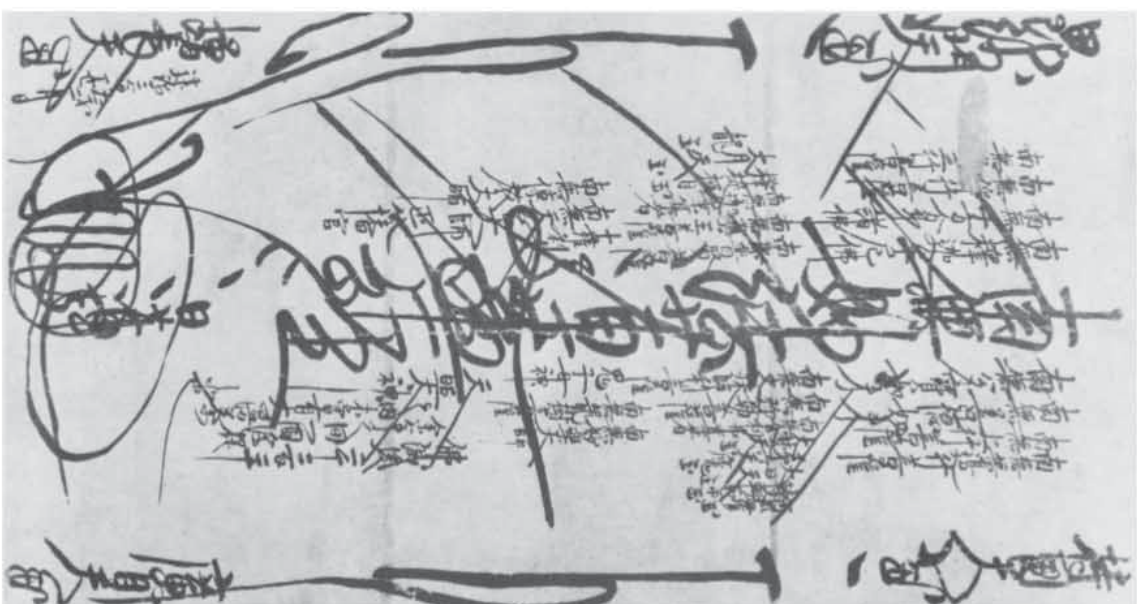
船中本尊 (佐渡妙法寺藏)



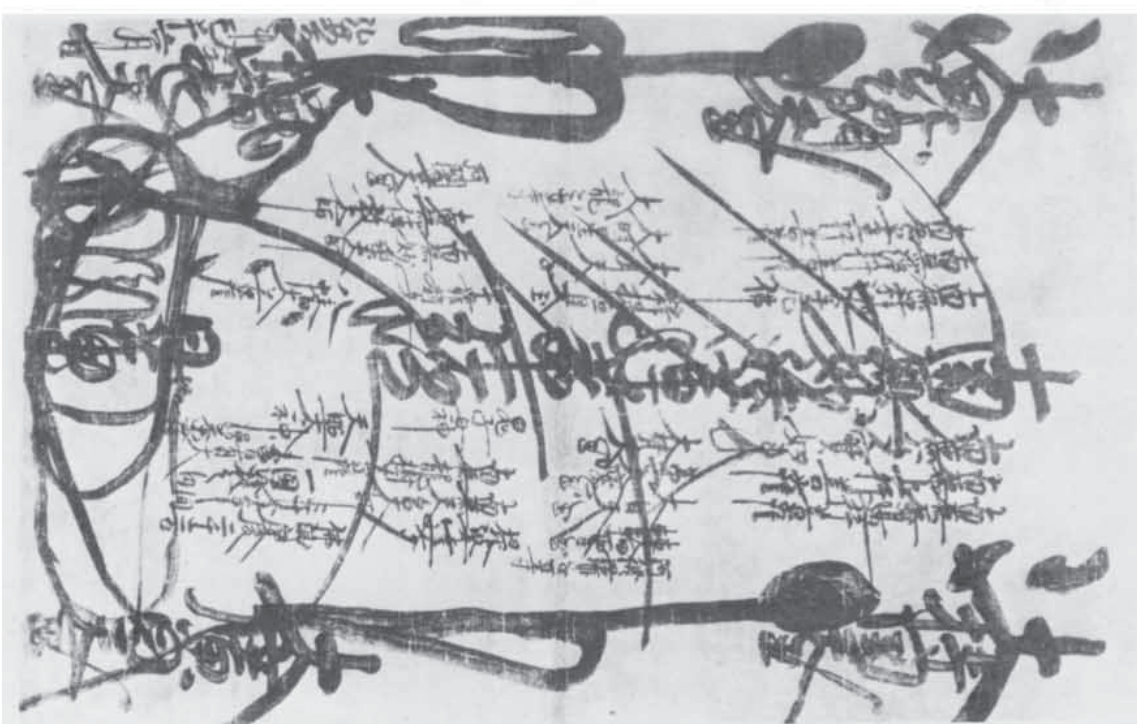
觀心本尊抄 (国宝·中山法華經寺藏)



文永期 (京都立本寺藏)



建治期 (京都本圓寺藏)



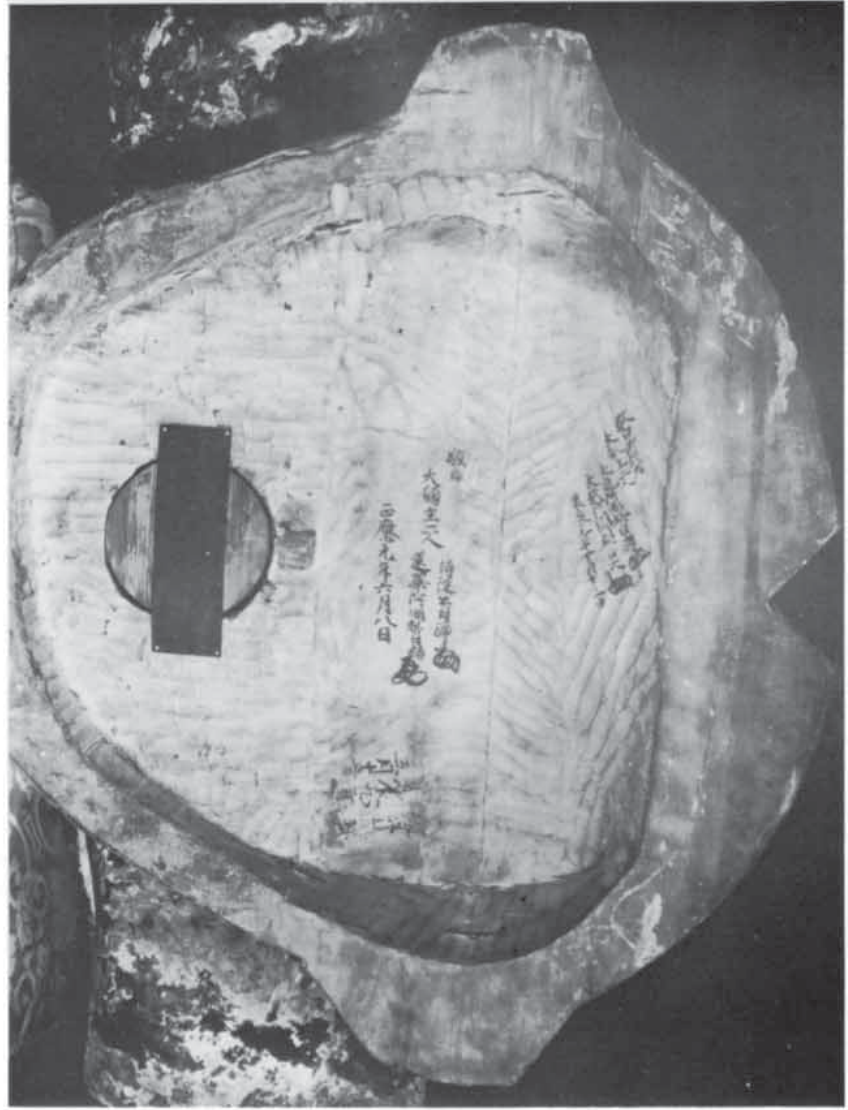
弘安期 (京都本圓寺藏)



博多 日蓮聖人銅像
(博多平和公園)

土牢 (鎌倉光則寺)
文永8年一弟子日朗他四名幽閉の遺跡

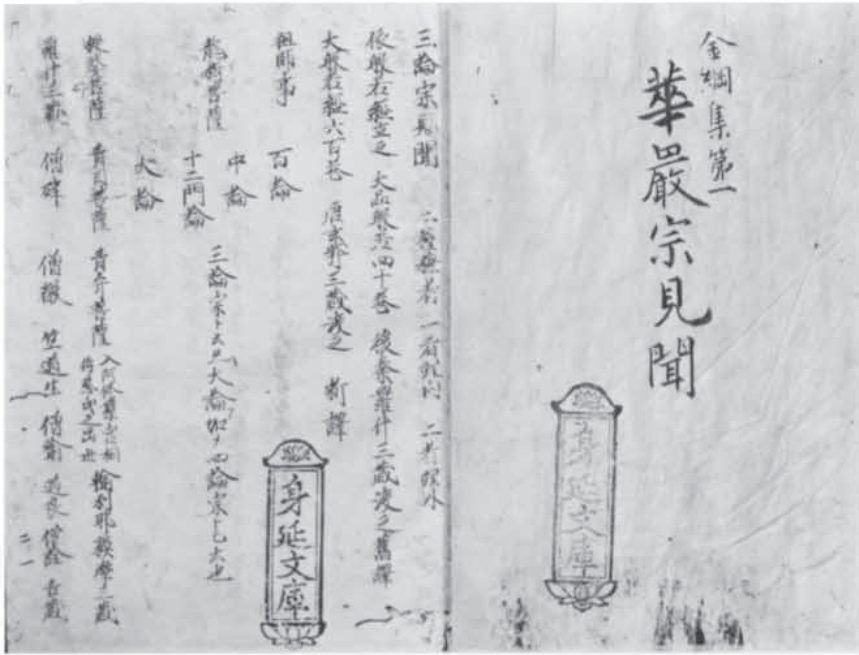




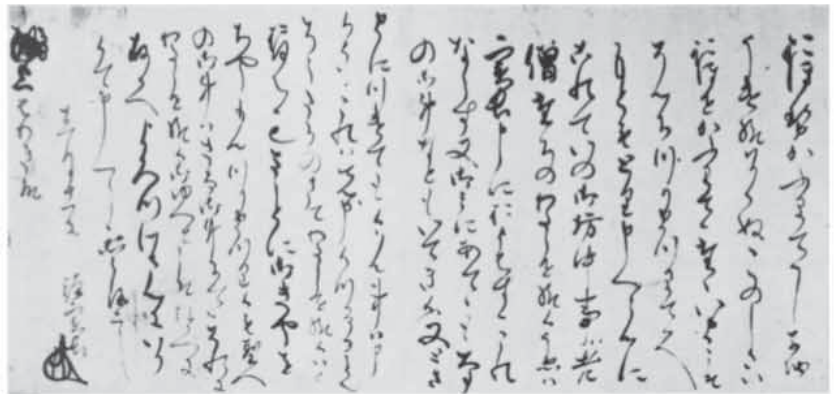
池上本門寺祖師像底銘 (池上本門寺蔵)



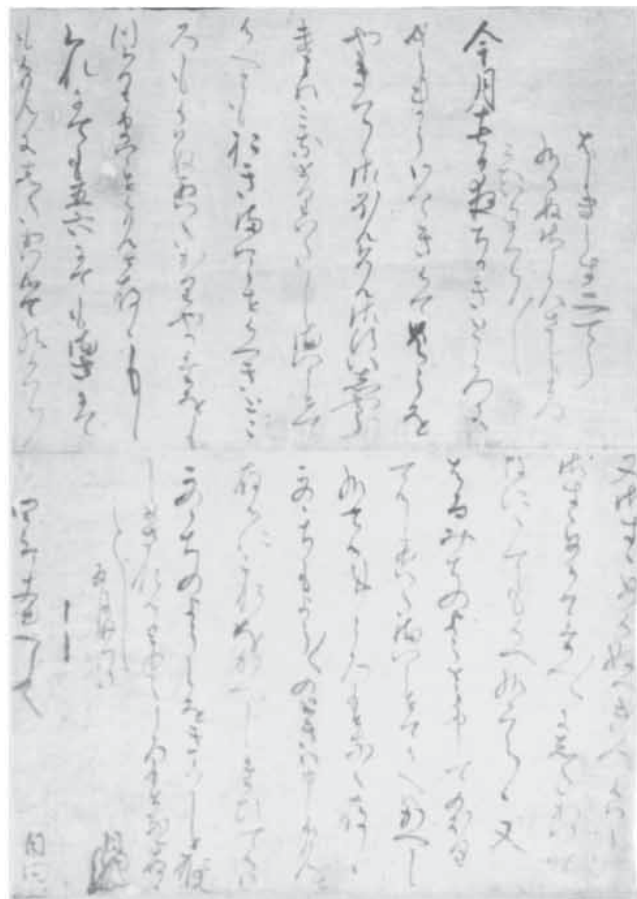
日蓮聖人御茶毘所 (池上本門寺)



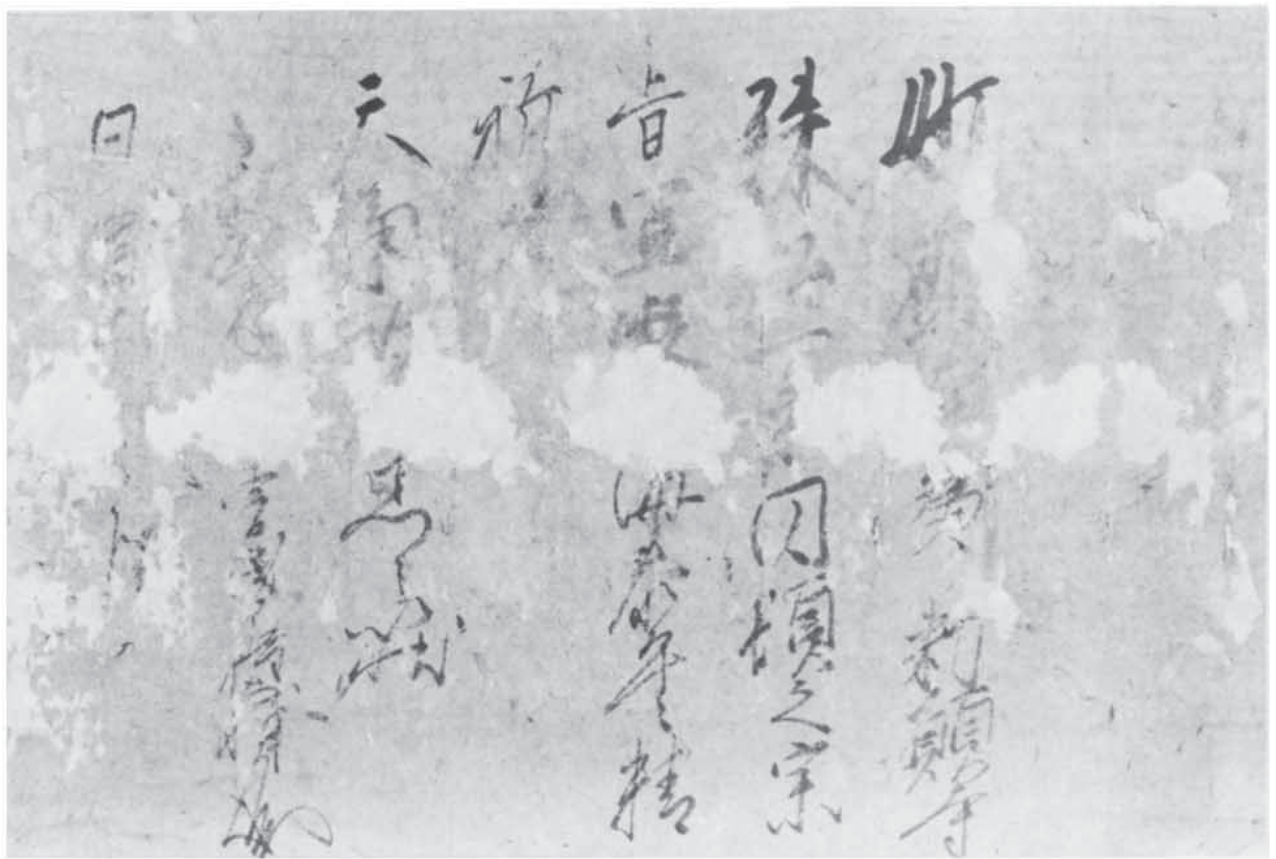
金綱集 (身延山久遠寺藏)



実長書状 (西山本門寺藏)



日向書状 (茂原藻原寺藏)

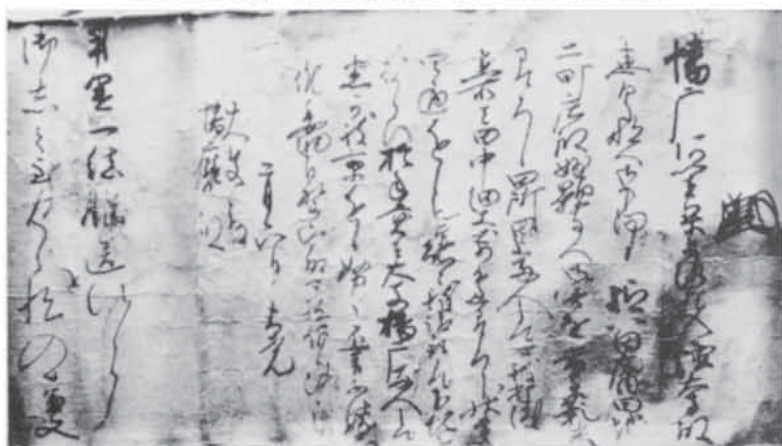


妙顯寺繪旨 (京都妙顯寺藏)



繪曼茶羅 (小浜本境寺藏)

妙顯寺文書 大覚妙実書狀 (京都妙顯寺藏)





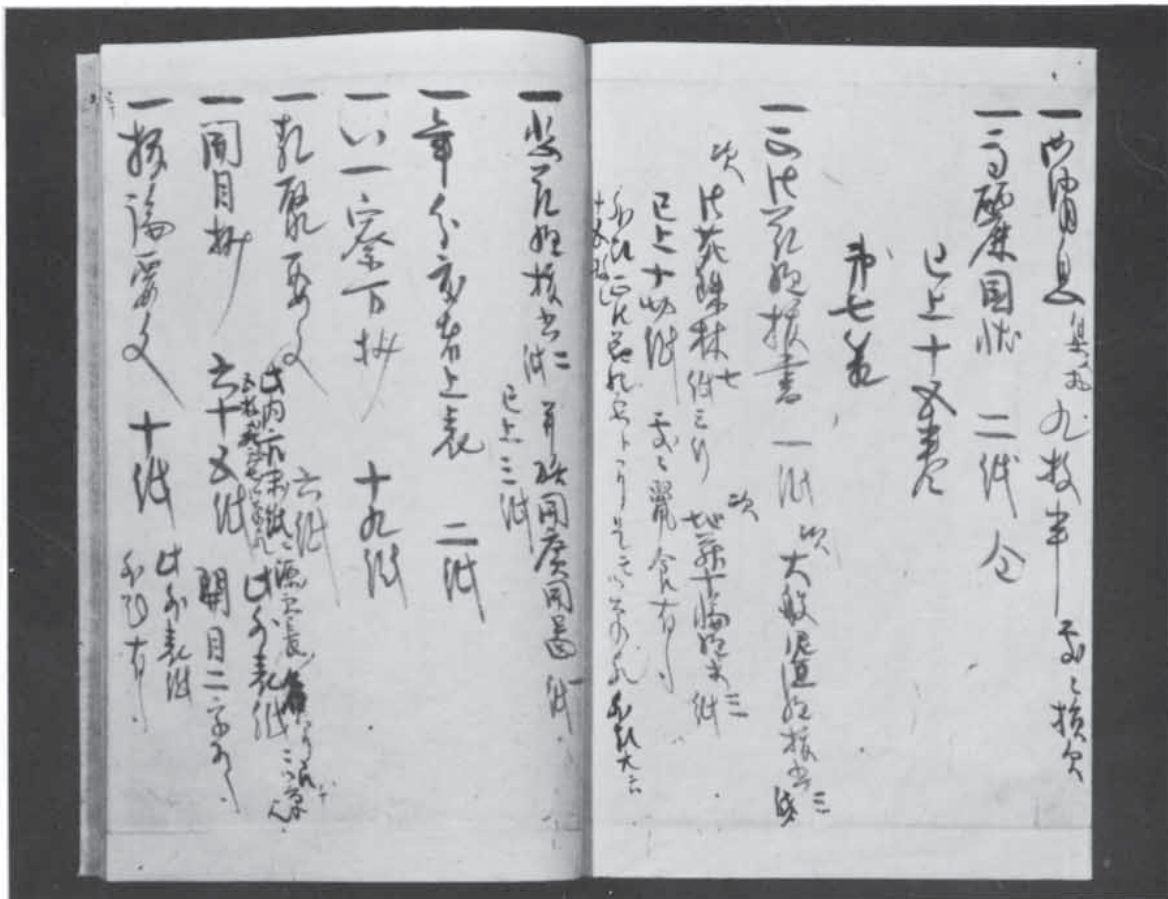
日重寿像 (大野本遠寺藏)



日遠寿像 (大野本遠寺藏)



日珣本尊 (京都頂妙寺藏)



日乾靈宝目錄 (身延山久遠寺藏)

定 當寺法式事

東

一 三時の息行處近かりしと行史辨也
 此は世に流るるに若一向一物花水の
 うらまはせしむは走 淡理指てい編く
 こと清く例

一 女堂の西敷元を花打唯二五回草す
 一 寺内は法 西高衣法にてつねに極
 行儀は 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 行方は 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 蓋の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 法勇の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 之 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

日親 定 本法寺法式 (京都本法寺蔵)

守護正義論 釋日奥撰之

夫以脱三途八難之惡趣生佛法流布國難曇花之
 萼開蒼溟波上又難值佛法得正法正師難梵
 天之鍊貫大地針穴故學佛法人數多自龍麟
 得道之者希自麟角而推宗門之徒佛法邪正
 且置不論之近代吾宗學者於佛法生惡見不可
 稱計是或好名聞事廣學多尤故或學孔丘莊
 老之道福佛法故或雖習正法不知末法下種由
 來故也凡夫之習付於佛法是增生死業其緣非
 一故偶厭世入佛道者攀附枝葉不奔正真猶如
 服藥起病識難治之次第也爰亦大相國秀吉
 公今就豐國明神自去文祿之比於大佛妙法
 院供奉此諸宗而當宗之立義不交他宗供奉祖
 師已來堅固制法不觸天下之耳目也其上先代
 之御教書奉行之判形是明白也而一宗之諸
 僧背佛祖遺誡受謗法供養始罪障之報中心
 怨之雖然謗法毒害一度失本心已來邪義
 日々具惡心月々増故起無盡群見捕種種
 邪會若至難巨述惡誹謗祖師嘲味先師故
 欲秋已義廣引經文皆悉違背佛色本意或為

日奥『守護正義論』 (岡山妙覚寺蔵)



一尊四士 (中山法華經寺藏)



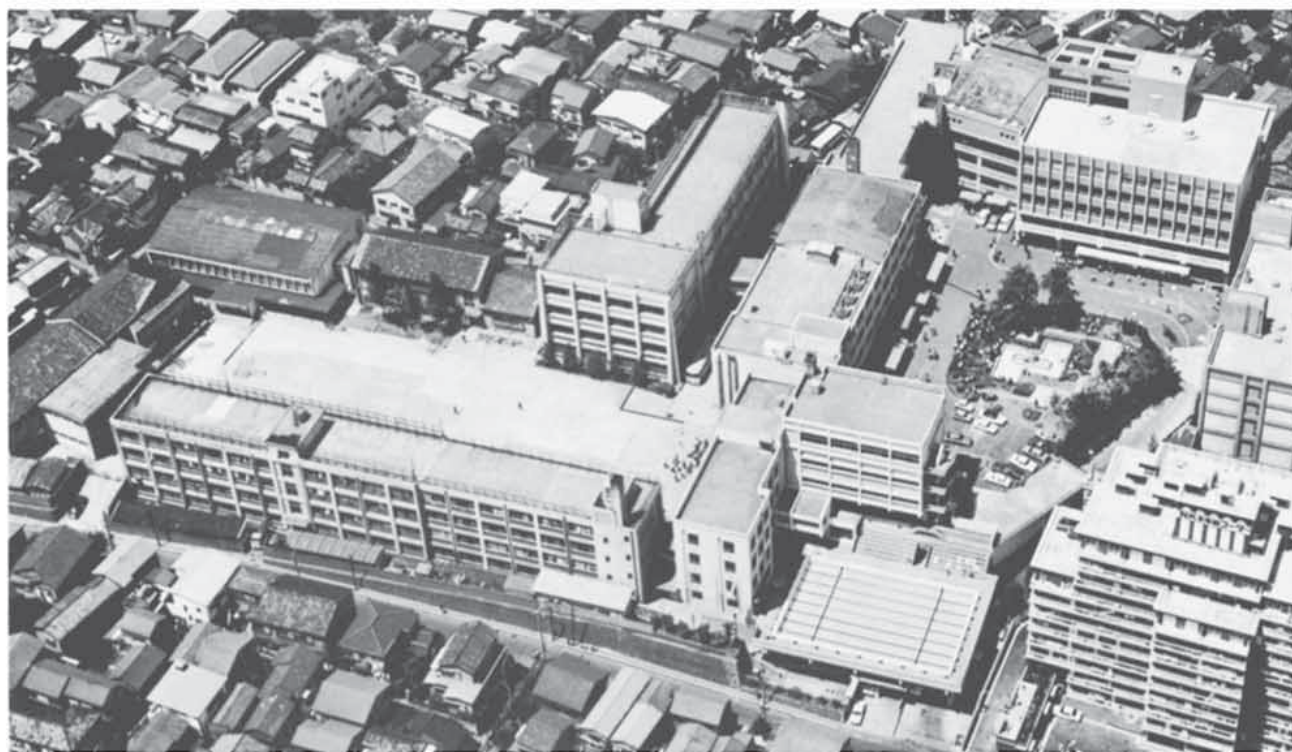
一塔兩尊 (茂原藻原寺藏)



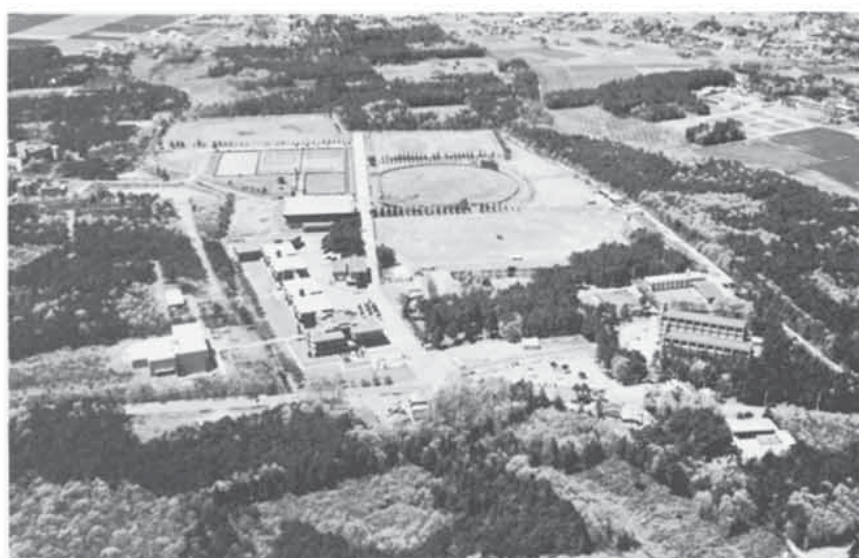
積尊涅槃図 (身延山久遠寺藏)



牛図二幅 俵屋宗達筆 (重文・京都頂妙寺藏)



立正大学▲大崎校舎
▶熊谷校舎



身延山短期大学

序 文

日本の生んだ世界に誇る宗教家日蓮聖人は、弘安五年十月十三日、武蔵国の檀越池上宗仲の館で六十一歳の波瀾に満ちた法華弘通の生涯を閉じた。

日蓮聖人は鎌倉新仏教の特徴である庶民救済のなかで、「釈尊出世の本懐は法華経以外にはない」という強い信念を持ち、立正安国を唱え浄仏国土顕現に心血を注いだ。

この日蓮聖人の「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は萬年の外未来までもながるべし」という遺訓と精神を体し、幾多の弾圧と殉教者を出しつつ、日蓮宗は七百年の歴史をみるに至った。

五十年に一度千載一遇の七百遠忌をここに迎え、全国の各寺院・教会・結社・又各管区においても様々な御報恩の記念行事や事業が展開されているが、この『日蓮宗事典』の大業は、宗門の記念事業の一環として企画されたものである。従って、その刊行の意義は重く、かつ深い。『日蓮宗事典』は日蓮教団七百年の集大成であることはいうまでもないが、日蓮聖人の第七百遠忌御宝前に献上する教団七百年の奉告文に擬するものである。同時に七百一年から新たに出発する教団の基礎事典ともいうべ

きものである。

従来、日蓮宗関係の辞典類は極めて少なく、教学・歴史・人名・明治以降の教団組織・布教・修法・法式・文学・書画・建築などについて調べる時は、それぞれの研究書に頼らなければならなかった。しかし『日蓮宗事典』は、右記の諸問題を解決するに充分足り得ると確信する。

今後、伝道布教に又宗門内外にわたって本書を充分に活用して頂き、日蓮教学研鑽が益々隆盛になることを願って止まない。

昭和五十六年十月聖辰

日蓮宗管長 日 威

刊行の辞

日蓮聖人第七百遠忌報恩事業の一環として、宗門初の総合事典である『日蓮宗事典』を上梓し、仏祖三宝の御前に奉献できるといふことは、実に意義深いことであり、感激に堪えません。

この『日蓮宗事典』は、宗祖以降七百年の宗門の歩みを結集させ、教学・教団史は勿論のこと、宗門の組織・布教・社会教化・修法・法式・文学・芸術に至るまで、広範に亘って詳説された総合事典的なものであり、我が宗門史上における一大金字塔とも申せましょう。

第七百遠忌を期して上梓された本事典は、宗祖に対する報恩感謝の表白であり、且つ、宗門七百年を語る報告書でもあります。故に、全国の各教師は、本事典を基として七百年の歴史を今茲に再認識し、宗祖の願業達成に向けて一層団結を強め、新たな第一歩を踏み出されんことを切望致します。

顧みるに、本事典刊行企画の嚆矢は、昭和四十六年二月の日蓮聖人御降誕七百五十年慶讃の時であ

りました。直ちに刊行準備委員会を発足し、昭和四十八年四月一日、更に、宗務役員・宗会議員・宗務所長・学識経験者による日蓮宗事典刊行委員会が結成され、昭和五十一年四月以降は第七百遠忌報恩奉行会の下にこの刊行事業が引き継がれ、宗門の報恩事業として着々とその運営・推進に努力してきましたのであります。

本事典の執筆に際しても、全国各地より各分野で御活躍中の諸先生・宗内各聖二百余名の御協力を賜り、また、各部門別においては、それぞれに主任先生が中心となり、入念なる検討が幾度となく繰り返されました。宗門史上画期的な大事業である故、執筆・解説の成文化には、困難を極めた語彙もかなり多くあり、そうした努力の結晶が漸く茲に実ったのであります。

真の報恩とは、七百年前の宗祖の御本意を咀嚼し、教師の各人が現代における宗祖の悲願成就を祈念しつつ、立正安国を活現するよう布教精進することにあると惟います。

本事典は、そうした布教の場からの要請に必ずや応えてくれるものであろうし、また、より良き資料をも提示してくれるものと確信致します。本事典の刊行が、将来の我が宗門を益々興隆・発展させ、更に各分野における日蓮教学研究の一助として大いに寄与されんことを希って止みません。

最後に、本『日蓮宗事典』刊行にあたって尽力された宗務役員・刊行委員・編集委員・執筆者、ま

た、協力を賜った日蓮門下各宗、各図書館、更に編集部の方々に、甚深の謝意と敬意を表する次第であります。

昭和五十六年十月聖辰

日蓮宗宗務総長

塩田義朗

編纂の辞

日蓮宗のことについて何でもわかるという本はないものであろうか、という言葉は随分前から聞かされてきたものである。一見この要望は宗門外の人々が日蓮宗に対してなされそうな注文のようであるが、実は宗門内部の人々の間で久しい以前からいわれていた言葉であった。かくて宗祖七百遠忌慶讃の記念事業として日蓮宗宗会に提案され、宗会の全員の賛同を得て、「日蓮宗の事なら何でもわかる本」の編集・刊行が企画され、これを「日蓮宗事典」と名付け、昭和四十七年十一月第一回「事典編集委員会」が発足し、次いで編集委員が委嘱され、昭和四十八年二月刊行委員会が開かれ実動に入ったのである。

本事典は如上の目的を充たすために、教学、歴史、組織・機構、布教・社教、修法、法式、文学、書・画・建築の八部門に分ち、それぞれ編集委員・同主任が委嘱され、分担、解説にあたることとなった。また、本書は「日蓮宗の全貌を集大成した宗門の総合事典で、一般社会への教化をも考え、布教資料として充分その任にたえうるもの、宗内の僧侶を対象とし、教師のハンドブック的なものとする」という性格のものに製作することとなった。

日蓮宗には辞典類が極めて少ない。『本化聖典大辞林』『法華辞典』『日蓮辞典』等、僅かに二、三を数えるのみで、それも先にあげた諸般の分野にまでは手をそめるには至っていない。いま本事典の企画するところは、戦前ならば宗門事情に規制されて、発表、解説も困難であった部門、すなわち従来考慮の外にあったものも、これを知り自由に解明することができるとして、宗祖御遠忌慶讃として此上ない報恩事業となることを確信している。

日蓮宗事典であるからには、教学と歴史の二部門に主力が注がれることはいうまでもない。宗門の生命、教団の全体はこの部門にあるのであって、これによって宗祖の生涯と思想、教学をうかがい、宗祖に「大難四箇度、小難数知らず」という迫害・波瀾の生涯をもたらせた諫暁精神、宗論活動、そして不受不施精神の発揚による法華経・妙法弘通のあとをしのび、宗祖直門の弟子檀那、さらに、末流諸師の不惜身命・死身弘法の諸先哲がいかにかこれを継承し発揮したかを、豊富な語彙と熟練した解説によって知って戴きたい。日蓮宗は明治維新により諸宗と同じく排仏毀釈という国学・神道者の攻撃にさらされたが、明治五年一宗一管長制がしかれ、これによって独自の宗制を構成することができるようになった。

第三の組織・機構部門では、管長制施行以後の宗制と教育研究機関の変遷を見るのであるが、これを昭和二十年終戦以前と、戦後日本の大変革後に分けて考察解明した。

第四の布教・社教部門は、布教の種類には言説・文書・視聴覚布教が考えられるが、まず言説布教について、その種類と歴史、説教の形式には一般的な法話（講演）と高座説教があり、それぞれの形式・内容・用具がある。また布教の対象・場所には、単に日本国内だけでなく海外の諸国が考えられねばならない。特に海外布教については、宗門は日本最初の海外布教者である六老僧の一人、日持上人を有しながら、そののち追隨者もなく、徳川時代の鎖国政策によって全く忘れ果ててしまったが、明治に入り、浄土真宗に先鞭をつけられつつも先覚の諸先師は眼を海外にむけ鋭意これに従い、妙法広布に努めた。また社会教化事業として、教育・福祉の面より国が行う関連業務とかかわりを持ちつつ、宗門独自の活動を行ってきた。この実態と行蹟もまた記録に止められ、後来の指針となるものである。

第五に修法部門は、宗教における救いの根本である祈りとその行法である修法——宗祖はこれらを合わせて「祈り」「祈誓」「祈請」「祈禱」といわれる——を宗祖の行蹟に探り、その伝承と発展のあとを見、さらに修法の諸流の歴史・用具・法式・口伝等の相伝まで解明する。

第六に法式部門では、法要式の歴史・法服・仏具・式具・声明をはじめ、法式・行事・法号撰に至るまで解説し、近來とくに注目されている声明、法式の面に力をそそいだ。

第七の文学部門は、法華経・宗祖・宗門・法華信者に関する文学作品・和歌・謡曲・狂言をはじめ

戯曲・音曲・講談・落語等の芸能作品を紹介して、法華経・南無妙法蓮華経が民衆といかに深く結びついているかを解明する。

第八の書・画・建築部門は宗門に伝承される書画・建築・彫刻其他について解説した。

本事典は、各部門に編集主任・同委員を中心にそれぞれに執筆を依頼し、二百余名に及ぶ多くの人員を擁したが、何分にも年令差による表現の異なり、執筆の練不練の差があつて、各部門の主任・編集委員には一応の整理・統一に一方ならぬ辛勞をおかけした。また修法部門では、用語の選定と共に説明の限度について意見交換と調停を重ね、伝承の公開が順当になされることとなつた。更に、本事典には日蓮宗及び門下連合各派本山・檀林の歴代譜を載録することができた。既に本年正月池上本門寺より『日蓮宗寺院大鑑』が記念事業として刊行されているので、これに載せられた寺誌と歴代譜は本事典の事項と互いに照応し不備を補い、それぞれに使命を發揮し得るものと信ずる。

終りに、本事典の刊行委員会・編集委員の諸師、並びに諸般の事務、補筆、連絡に苦勞を煩わせた事務局専従宮川了篤師はじめ事務局の皆さんに深甚の謝意を捧げ、中途にして遷化せられた歴史部門西村泰賢上人、組織・機構部門石川存静上人、布教・社教部門三田村龍全上人、修法部門鈴木常耀上人、文学部門兜木正亨上人の五編集委員上人の増円妙道をお祈りする。なお本文中に多くの先学の御意見、並びに著書を引用させていただいた。一々におことわり申し上ぐべきであるが、ここに厚く御

礼申し上げる次第である。

最後に困難な印刷・組版を引き受けられた東京堂出版、執拗と思われるほど相談相手になって戴き、面倒をおかけした同編集部長古河功氏はじめ同社の皆さんに心から御礼申し上げます。

昭和五十六年十月聖辰

日蓮宗事典編集主幹

宮崎英修

目次

序文	日蓮宗管長	日威	文	学	一〇二一
刊行の辞	宗務総長	塩田義朗	書・画・建築		一〇九五
編纂の辞	編集主幹	宮崎英修	編集後記		一一二三
日蓮宗事典			付録		一三三〇
凡例			管長歴世・宗務総監・宗務総長		一三二九
教	学	一	立正大学歴代学長・理事長		一三二七
歴	史	四三五	歴代譜		一三二六
組織・機構		七四九	日蓮宗宗章		一一三二
布教・社教		八四五	仏塔の諸形態		一一三一
修	法	八九三	日蓮宗諸門流系図		卷末貼付
法	式	九六一	索引		一三七六

題
簽
日蓮宗管長金子日威

日蓮宗事典

凡 例

本事典は、教学、歴史、組織・機構、布教・社教、修法、法式、文学、書・画・建築の八部門から成る。

見出し語と配列について

- 1 見出し語は、表音見出しと本見出しの二本立てとした。
- 2 表音見出しは、現代仮名遣いによる平仮名、本見出しは原則として常用漢字を用いた。但し、特定の固有名詞・術語については、日蓮宗の慣用に従い、必要に応じて例外を認めた。
- 3 見出し語の訓読みは、総て日蓮宗の伝統的通称に従った。
(例) てんぶんほうなん → てんもんほうなん 天文法難
どきょう → どつきょう 読経
- 4 人名の見出し語は、原則として諱で出し、俗称が著名な場合に限りこれを見出し語とした。また、明治以降の人名は姓名を、日蓮宗外の人名は通称を用いた。
- 5 配列は、現代仮名遣いによる五十音順とし、長音・濁音・半濁音・中は配列上無視した。
- 6 同音・同字の人名・寺名は、それぞれ生没年・創立年の古い順とした。

解説について

- 1 記述は、常用漢字・新字体・現代仮名遣いを原則とした。但し、特殊な仏教術語や宗学用語等、必要に応じて制限外の漢字・仮名遣いを用いた。
- 2 引用文における経典・遺文・原漢文は、原則として現代仮名遣いを用い、書下し文に改めた。但し、和漢混淆文は原文に従った。
- 3 計量は原則としてメートル法を用いた。但し、必要に応じて尺貫法も併用した。
- 4 数字は漢数字を用い、十・百・千の使用を避け、万単位以上を使用した。但し、固有名詞や慣用語句等、数詞が成語化したものはその限りで

はない。

- 5 年代の表記は元号を用い、() で西暦を示した。
- 6 地名は原則として現在の呼称に従ったが、現在地が明らかでない場合、また歴史的意義のある地名の場合に限り、旧称を用いた。
- 7 日蓮聖人にのみ聖人号を用いたが、敬称は原則として割愛した。
- 8 参考文献は、必要と思われるもののみ各項目の最後に付した。
- 9 大項目に限り、文責を明らかにするために、最後に執筆者の姓名を()内に付した。

符号・記号

- 「」 引用文・注意を促す語句・論文・新聞・法規等の細則、表題。
- 『』 書名・経典名(但し法華経に限りこれを省いた)。
- 〔 〕 長文解説中の小見出し。
- 〈 〉 引用文中特に注意を促す部分や語句。
- 《 》 参考文献
- 「…から…」を示す(主として年号の表記)。
- ↓ 該当項目および参照項目。
- (略) 引用文の省略。
- 定〇〇頁 『昭和定本日蓮聖人遺文』の頁数。

略称

大正藏経又は大正——大正新脩大藏経。
宗全——日蓮宗宗学全書。日全——日蓮宗全書。

付録について

巻末に、歴代管長・宗務総長一覧、日蓮宗諸門流系図、祖山・靈跡・由緒寺院歴代譜、各派本山歴代譜、檀林歴代譜、日蓮宗宗章とその描き方を添付して参考に供した。なお、最後に、全取載項目を含めた五十音順の索引を付した。取載項目の一覧表として利用されたい。

刊 行 委 員 会

○塩田 義朗	小幡 潮薩	影山 堯雄
植木 泰山	風間 隨仁	加藤 海晃
風間 円静	久保田正文	小林 顕栄
(故)北村 行進	渋谷 直城	巽 寿円
佐久間智周	野村 耀昌	長谷川正徳
中濃 教篤	松村 寿顕	丸山 日雄
藤田 教忠	三井 宣雄	宮崎 英修
三谷 会祥	吉田 文堯	渡部 日皓
茂田井教亨		

編 集 委 員 会

教 学 部 門		
○浅井 円道	小松 邦彰	室住 一妙
茂田井教亨	渡辺 宝陽	
歴 史 部 門		
○宮崎 英修	冠 賢一	中尾堯文(堯)
(故)西村 泰賢	林 是幹	松村 寿巖
組 織 ・ 機 構 部 門		
○三谷 会祥	(故)石川 存静	風間 隨仁
(故)北村 行進	牧野内寛清	
布 教 ・ 社 教 部 門		
○長谷川正徳	石川 泰道	岩間 湛良
(故)三田村龍全	横山 邦雄	
修 法 部 門		
○加藤 瑞光	(故)鈴木 常耀	戸田 日輝
久村 諦道		
法 式 部 門		
○鬼頭 潮龍	下宮 高俊	戸田 浩暁
中村 鍊敬	早水 弁静	
文 学 部 門		
○中村 鍊敬	石川 教張	今成 元昭
上田 本昌	(故)兜木 正亨	桐谷 征一
書 ・ 画 ・ 建 築 部 門		
○野村 耀昌	坂輪 宣敬	野坂 法山

執 筆 者

赤星 憲司	秋山 智孝	浅井 円道	朝比奈安成	雨宮 通仁
新井 文祥	有光 友逸	有村 友伸	池上 尊義	池田 順康
石川 教張	石川 教統	石川 教道	石川 浩徳	石川 泰道
石黒 淳雄	石本 恵明	市川 智康	伊藤 栄乗	伊藤 勝淳
伊藤 瑞叡	伊藤 立教	糸久 宝賢	稲荷 泰雅	井上 博文
岩田 諦静	岩間 湛良	上田 栄寿	上田 栄暢	植田 観樹
植田 観泰	上田 本昌	上木 龍明	今成 元昭	内山 堯邦
梅木 良明	遠藤 是秀	庵谷 行亨	近江 幸正	大倉 偉行
大西 観陽	岡田 栄照	岡元 鍊城	小川 日進	沖原 龍進
奥野 本洋	奥邨 学進	尾谷 卓一	小埜 栄裕	小野 文珙
貝山 宣泰	掛下 節怜	影山 堯雄	風間 随仁	梶山 日深
片桐 海石	加藤 瑞光	金山 見学	金子 光瑩	金子 善英
鎌田 行学	川添 昭二	菅野 啓淳	冠 賢一	北川 前肇
北村 行遠	(故)北村 行進	鬼頭 潮龍	桐谷 征一	銀杏 高照
久住 謙是	工藤 泰山	久保木学洋	久保田正文	倉橋 観隆
久留宮圓秀	黒田 秀明	河野 智彰	小林 栄雄	小松 邦彰
権藤 泰隆	斎藤 通雄	斎藤 龍遵	坂本 勝成	坂輪 宣敬
佐々木孝憲	佐藤 光春	佐藤 拓温	清水 龍淵	下宮 高俊
下宮 高純	庄司 寿完	白部 哲應	白山 智宏	神保 泰紀
新聞 進一	(故)新聞 信雄	勝呂 信静	鈴木 英正	鈴木 浄元
鈴木 治美	(故)関 勝興	妹尾 啓司	高岡 完匡	高木 豊
高桑 正温	田賀 龍彦	高佐 重長	竹田 智道	高橋 謙祐
田沢 元泰	田島 海義	立花 昌徳	丹治 智義	塚本 啓祥
土田 恵敬	土屋 学周	土屋 賢明	都築 哲二	戸田 浩暁
永岡 淳正	中尾 堯	永倉 嘉行	中島 本要	中條 暁秀
長瀬 貫公	中濃 教篤	永村 経信	中村 孝也	中村 瑞隆
中村 鎌敬	灘上 謙一	新倉 善之	西片 元證	(故)西村 泰賢
貫名 完一	野坂 法山	野村 耀昌	長谷川正徳	浜島 典彦
早坂 瑞隆	林 是幹	林 是晋	早水 弁静	原 日認
日比 宣正	深沢 友遠	藤井 教雄	藤崎 正幸	藤山 英雄
分銅 志静	星 光喩	星野 勵温	細井 友晋	本田 栄秀
本間 慈郷	本間 裕史	牧野内寛清	牧野 博悠	町田 是正
松井 孝純	松井 義海	松井 大周	松村 寿顕	松村 寿巖
松吉 範員	丸山 孝雄	丸山 邦雄	三谷 会祥	(故)三田村龍全
三友 健容	宮内 淳平	宮内 武範	宮川 了篤	宮崎 英一
宮崎 英修	宮渕 泰存	村上 東源	村野 宣忠	村野 宣男
室住 一妙	望月 海英	望月 海淑	望月 康史	望月 龍学
望月 良晃	八木 大慈	山口 智光	山口 裕光	山田 一光
山本 光明	横山 邦雄	吉塚 通敬	吉田 文堯	米田 宣雄
若杉 見龍	渡辺 一之	渡辺 信勝	渡辺 宝陽	渡部 日皓

資 料 提 供

後藤 泰淳 (故)鈴木 常耀 平野 日将

編集後記

新しいものが作り出される時は、常に先師、先学の業績の踏藉なくしてはあり得ない。この『日蓮宗事典』の刊行もその例外ではなく、幾多の業績の上に成り立ったものである。

従来、日蓮宗関係には辞典類が極めて少なかった。『本化聖典大辞林』三巻、『法華辞典』の二冊を数えるだけである。『本化聖典大辞林』は、明治三十六年に発願され、実動に入ったのは同三十九年四月からである。その後、十五年の星霜を経て大正九年十二月二十一日に刊行された。また『法華辞典』は、昭和二年六月三十日に刊行されたのである。以来、五十有余年の今日に至るまで、この類の出版を見ることはなく、両書とも数年前に復刻された。この事からしても判るように、両書が今日まで広く活用され、多くの学究の徒に便宜を供与していることを示しているといえよう。

しかし、多様化している現代社会において、布教の第一線で活躍している教師、日蓮教学の研鑽に励まれている方々、さらに檀信徒から、「日蓮宗の事なら何でもわかる」時代に適応した新しい形の辞典を求める声が次第に沸き上がってきた。

一方、こうした状況のなかで、昭和三十六年三月、第九日蓮宗宗会は「宗祖降誕七百五十年慶讃準備委員会規程」を制定し、同四十二年九月に任命された準備委員は、記念行事・事業・予算等を検討した。この過程において委員の風間随仁師は、熱心に「日蓮宗総合事典」の刊行を提案し、事業の中にもられることとなった。同四十四年三月、第二十二宗会において「日蓮聖人降誕七百五十年慶讃会規程」が上程され、行事・事業・予算等を可決確定した。その結果、「日蓮宗総合事典」は宗門の一大事業として確立するに至ったのである。

よって、慶讃事業の一つとして認められたが、その予算は百万円に過ぎなかった。これは事典の内容が膨大であること、出版費が巨額を要すること、の二つの事由があった。また二年後にせまる慶讃期日に刊行不可能のため、昭和五十六年にお迎えする日蓮聖人七百遠忌に記念出版することを目ざして準備することとなった。したがって、その研究および準備費に前掲の百万円が計上さ

れたのである。

翌昭和四十五年二月十二日、「日蓮宗事典編集準備委員会」が開かれ、立正大学名誉教授影山堯雄師の御出席のもとで、教学、布教、法式・行事、彫刻・絵画・建築、歴史、地誌、教団組織機構、俗語（隠語）の八部門が具体的に立案化された。

さて、昭和四十六年二月十六日の日蓮聖人降誕七百五十年慶讃は、数々の記念と行事の足跡を残し、厳粛裏におくることが出来た。この慶讃事業が完遂されると早々に、同年三月に「日蓮宗綜合事典編集委員会規程」が制定され、翌年八月二日に再度の「準備委員会」が開かれた。本会において、編集委員ならびに主幹の選出方法が討議決定された。

これによって、昭和四十七年十一月十六日、正式に第一回「事典編集委員会」が開催されるに至ったのである。本会において「日蓮宗綜合事典」の名称を『日蓮宗事典』と改称し、綜合事典であることを念頭におき、先の準備委員会で立案化された八部門を、教学、歴史、組織・機構、布教・社教、修法、法式、文学、書・画・建築と変更し、隠語・道語は付録に入れることに決定した。また同年十二月八日に日蓮宗事典編集室が宗務院内に設置されたのである。

昭和四十八年三月の第二十七宗会において、「日蓮宗事典刊行委員会規程」が制定されるや、先の編集委員会は廃止され、事典の刊行にいたる一切は、編集を含めて刊行委員会が主体性をもつこととなった。また教務部所管として刊行の準備にあたることとし、その運営費は通常予算が適用された。更に、同年四月一日付をもって、刊行委員と八部門の編集委員が正式に委嘱されたのである。しかし、各部門別の編集会議が実動に入ったのは、同年一月からのことであった。

他方、こうした刊行の推進とは別に、総本山身延山久遠寺で企画した『日蓮聖人遺文辞典』を、すでに立正大学日蓮教学研究所在において着手し、語彙のランク付けも半ば終り、執筆の段階に入る矢先のことであった。それ故に、先に立正大学学長故坂本日深師は、「七百遠忌に二つの辞典を出すことは執筆者の陣容からして無理」とみて、『日蓮宗事典』の七百遠忌出版に難色を示した。

結論的に述べると、『日蓮宗事典』と『日蓮聖人遺文辞典』は、暫くのあいだ並行して進められていた。こうした実状からして、正直なところ、七百遠忌には双方とも出版できないのではないかと、という共倒れの危機感を抱いたこともあった。ところが昭和五十三年になって、身延山久遠寺と日蓮教学研究所在が、『日蓮宗事典』は宗門の議決によるものであるから先に出し、『日蓮聖人遺文

辞典』は後回しにする、という理解と協力を示してくれたのである。この理解と協力なくしては、この『日蓮宗事典』を七百遠忌の御宝前に供えることが出来なかつたかもしれない。従って、この方針を知らされた時には感慨無量であった。今は身延山久遠寺と日蓮教学研究所に対し、先ず深甚の謝意を表するとともに、今後一日も早く『日蓮聖人遺文辞典』の刊行されることを祈って止まない。

さて、この『日蓮宗事典』は、七百遠忌まで八年と九カ月という、短期間で刊行させなければならなかつた。事典づくりというものは、労のみ多くしてなかなか進展しないものである。そうしたことを考えると、一刻の猶予もない、という焦りがあつた。編集委員は祖師への報恩を異口同音に唱え、こうした事情を諒解してくれたことはいうまでもない。

勿論それ故に、第一回目の編集会議から熱心に討議が行われ、先ず語彙の収集方法である項目が立てられた。教学部門においては先述した『日蓮聖人遺文辞典』との関係から、極力重複する語彙は避け、聖人滅後の教学用語と著述に力を注ぐこととした。歴史部門は、事件・人名・寺名・習俗・伝承・地誌などの項目を立て、特に人名については「日蓮宗人名辞典」にもなりうることを目標に、解説の可能な限り拾うことにした。組織・機構部門は、明治維新以後の管長制・宗門制度・教育研究機関などの変遷を中心に項目を立てた。布教・社教部門は、言説・文書・視聴覚の各布教と用具、日蓮宗と社会教化事業の関連など。修法部門は、聖人の祈り・修法の歴史・用具・法式・庶民信仰との係わり、など。法式部門は、声明・行事・仏具・法号・法服、等。文学部門は、仏教文学・宗祖関連文学・宗門と文学・戯曲・評論・童話・和歌・謡曲・文芸・音曲、等。書・画・建築部門は、部門名がそのまま項目であり、宗門に伝承されるものを中心においた。

以上のように八部門がそれぞれの項目を立てて、昭和五十年二月までの約二年間、語彙の検索に努めた。この結果、収録された語彙カードは一万九千六百余を数えるに及んだ。「ことば辞典」とは異なり、あくまで百科事典的性質であるので、関連する語彙の選定と語彙の内容によるランク付に、さらに二年という実に長い時間と労力を要した。こうしてようやく、昭和五十二年四月に約六千語彙に取捨選択した原稿依頼に漕ぎ着けたのである。

執筆期間は、昭和五十四年十二月までの二年六カ月間とした。原稿を依頼した人のなかで、一人として断って来た人はいなかつ

た。しかし、最初の一年間はなかなか原稿が集まらず、各方面から「遠忌に本当に出版できるのですか」という心配を頂いた。そうした声を聞く度に、大幅に遅れていく年度計画をみては、あの期間中にもっと急いでおけばよかった、この期間にはこうしておけばよかった、という反省と、もし遠忌に間に合わなければどうしよう、という不安に駆り立てられたこともあった。ところが昭和五十三年九月頃から原稿が集りはじめると、以前の不安は多忙と打って変わった。同五十四年十二月には九八パーセントの原稿が集まり、同五十五年三月には一〇〇パーセント完了したのである。この間、部門別の主任・編集委員による数回の合宿で、原稿の再点検や書き改めを要したのもあった。

一方、昭和五十一年四月に日蓮聖人第七百遠忌報恩奉行会が設置され、『日蓮宗事典』は事業計画中の出版事業に属し、七百遠忌記念事業の一環としてその第一席に置かれ、一億二千万円が計上された。しかし諸物価の高騰により、さらに同五十四年四月には二千万円が上積みされ、一億四千万円の子算となった。翌五十五年二月には、二年前に『日蓮辞典』を刊行した実績と縁をもって、株式会社東京堂出版と契約を結ぶに至ったのである。

昭和五十五年三月から校正がはじまった。編集委員は全国におり、校正のゲラを郵送し、編集室にもどってくるまでにはかなりの日数を必要とした。限られた校正期日内には円滑にことが運ばない。それ故に、八部門別の編集委員による再度の校正の合宿が行われた。この合宿も、一度で済むことはなかった。二度、三度と回を重ね、加えて索引づくりの合宿へとなった。山務と行事の多忙のなかで、合宿という強行日程にも拘らず、編集委員の一人として愚痴をいう人はいなかった。それだけ、この『日蓮宗事典』を遠忌に出版させるのだ、という責務と自覚をもっていったといえよう。

他方、こうしたなかで、編集室にはもう一つ大きな仕事加わり多忙を極めた。付録の祖山・靈跡・由緒寺院歴代譜、各派本山歴代譜、檀林歴代譜がそれである。この歴代譜は、歴史部門の編集委員であった西村泰賢師が、以前から長い年月をかけて一人で調査していたのである。しかし、昭和五十三年九月三十日に、惜しくも西村師は五分の三ほど調べを成した途中で遷化せられたのである。従って、時間と労力を要する歴代譜を完成させることは無理との判断から、一度は断念せざるをえなかった。ところが家族の方から、西村師が病院のベッドの上でも調べを続けていたことを聞かされ、感嘆すると同時に胸に迫るものを感じた。西村師

の遺志を継ぎ、できる限りの努力をして完成させようと、編集室独自の調査をはじめたのである。

丁度この頃、池上本門寺においても七百遠忌記念に『日蓮宗寺院大鑑』の刊行を進めていた。この寺院大鑑にも歴代譜を載録するところから、お互いに照応しあい、さらに編集室なりに各寺院に問い合わせを行った。幸いに『日蓮宗寺院大鑑』が昭和五十六年一月に刊行された。寺院大鑑を基に細かに調べていけば、かなりの不備は補えるのだが、もうその時間はなかった。だが、一度刊行すれば容易に改編できないことを承知しているだけに、最後の最後まで努力を惜しまずにはいられなかった。こうした事情を東京堂出版は汲み取ってくれ、本組の期日ギリギリの六月三十日まで、校正と加筆することに理解を示してくれたのである。

憶えば八年九カ月の編纂のなかには数々の思い出がある。特に、付録に最初から入れることに決まっていた隠語・道語は、中村鍊敬師が八十七歳の高齢にもかかわらず、約千七百の語彙を探索し、解説してくれたことである。しかし、内容が遠忌記念の『日蓮宗事典』には相応しくない、誤解を生じやすい、の二つの事由から載録しなかった。いつの日か、機会があったならば世に出でんことを願わずにはいられない。

こうした紆余曲折を経ながらも、この『日蓮宗事典』が刊行され、七百遠忌記念事業として世におくり得たことは、全宗門人の報恩の証と、眼にみえない苦勞と努力の結晶である。また、多くの日蓮教学を研鑽される方々に裨益せしめるものと自負する。

本事典の刊行は、飽くまで歴代宗務内局の強力な推進によるところであるとはいえ、刊行委員会・編集委員の諸師、遠忌実行委員会・事業部会の諸師の御理解と御協力によるものであり、また資料を提供して下さった各寺院・日蓮門下連合会各派本山に対し、深く感謝申し上げます。なお一部の写真を提供して頂いたカメラマン三上七生氏、および毎日新聞重文事務局に御礼申し上げます。ことに、本事典の刊行を見ずして中途にて遷化せられた、修法部門の鈴木常耀師、組織・機構部門の石川存静師、歴史部門の西村泰賢師、文学部門の兜木正亨師、布教・社教部門の三田村龍全師等、五師の編集委員の増円妙道をお祈りし、衷心より感謝申し上げます。さらに、編集委員同様に尽力して下さった教学部門の北川前肇、庵谷行亨、小野文瑠の三師、歴史部門の林是晋、北村行遠の両師、布教部門の菅野啓淳師、修法部門の上木龍明、植田観泰、石黒淳雄、佐藤光春、掛下節怜、鈴木英正の六師に対し、深甚なる敬意を表す。

『日蓮宗寺院大鑑』の編集に参画し、本事典の歴代譜や校正に寸暇を惜しまず協力してくれた本間裕史師、サンスクリットや諸般の調査に奔走して下さった井上博文師に謝意を表す。

最後に、この『日蓮宗事典』という特殊な書の上梓を快諾された東京堂出版、編集室のよき相談相手となって頂き叱咤激励された同社編集部長古河功氏、実際の仕事にあたって、こと細かに配慮をして頂いた編集部の中幸恵氏に厚くお礼を申しあげる。

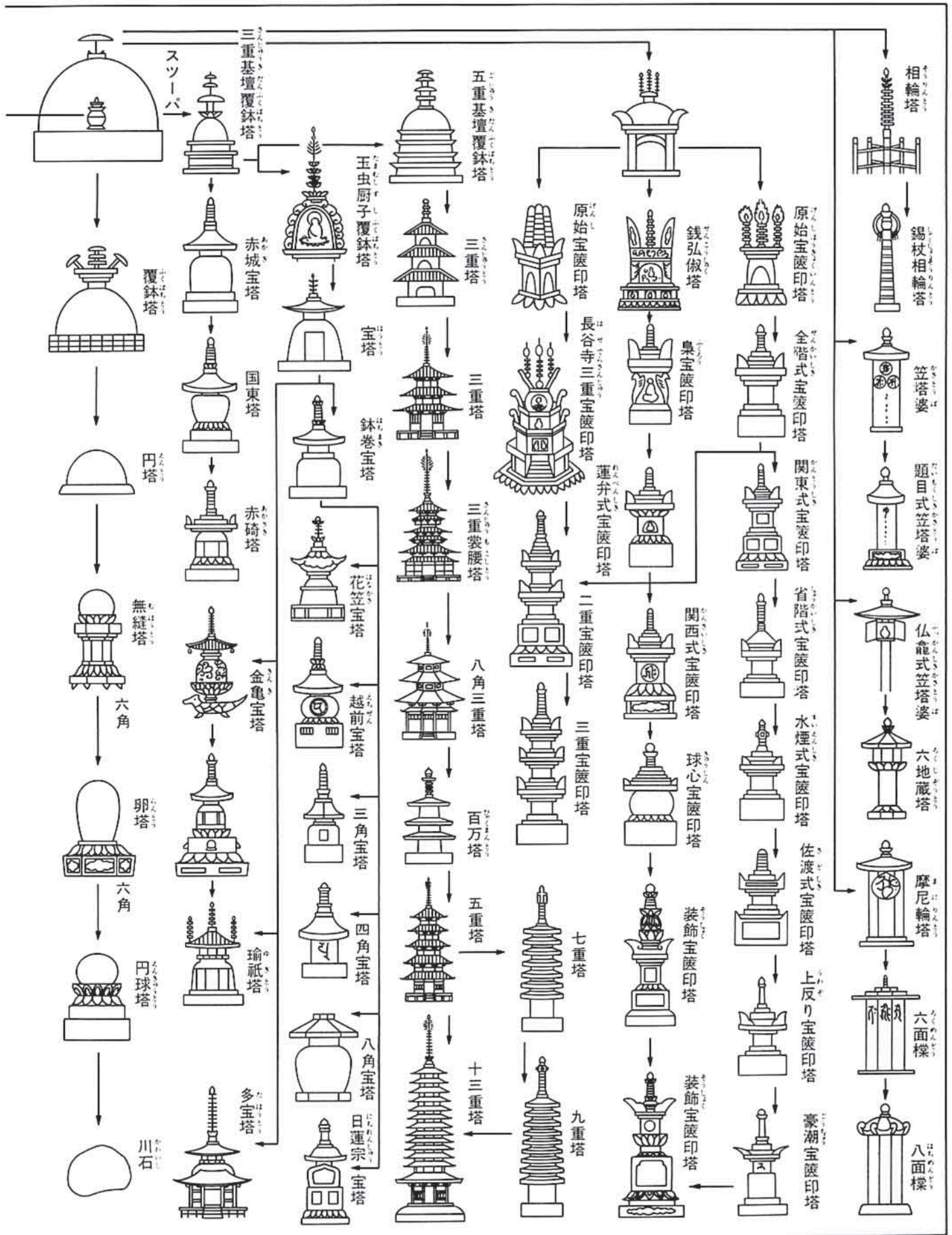
なお、本事典の本文解説にあたって、先学の著書を多く参考、または引用させて頂きました。本来ならば一々おことわりすべきですが、ここに感謝の意を示し、厚くお礼を申し上げます。

昭和五十六年十月

日蓮宗事典編集室主任

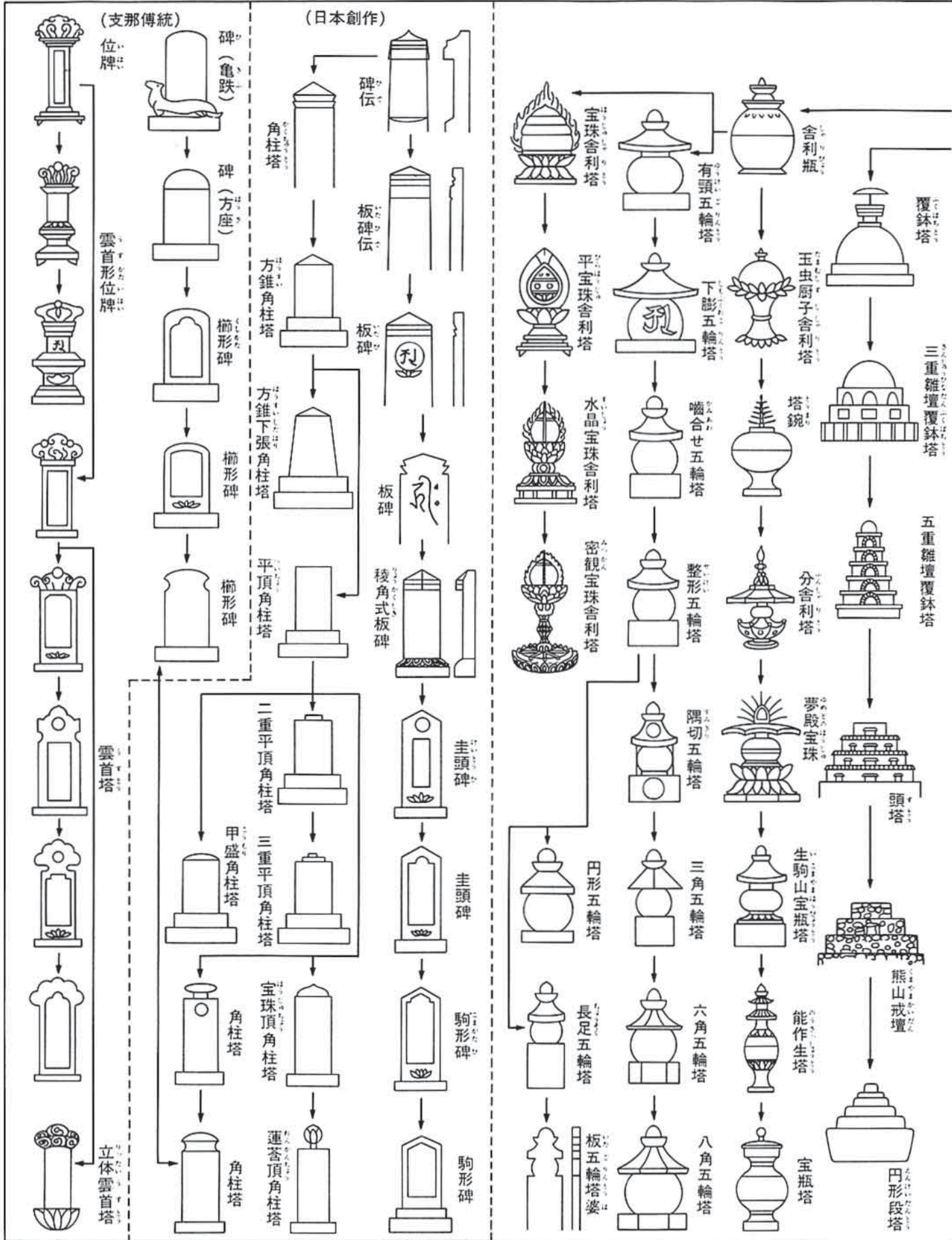
宮川了篤

編集に携わった有縁の方々、糸久宝賢、西片元證、稻荷泰雅、大西観陽の諸師、並びに日蓮教学研究所研究生、また編集室の三沢礼子、福原和子、加藤宗子、山本美枝子、橋本恵子の各氏等の労苦に感謝する。

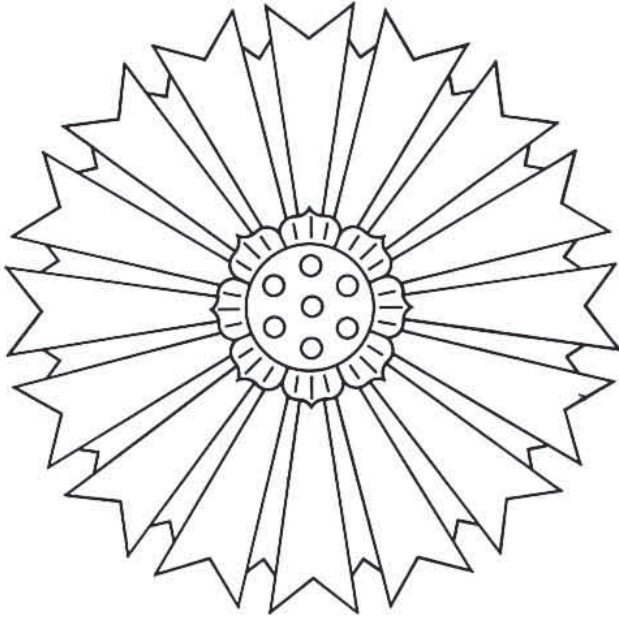


仏塔の諸形態

(石田茂作『日本仏塔の研究』転載)

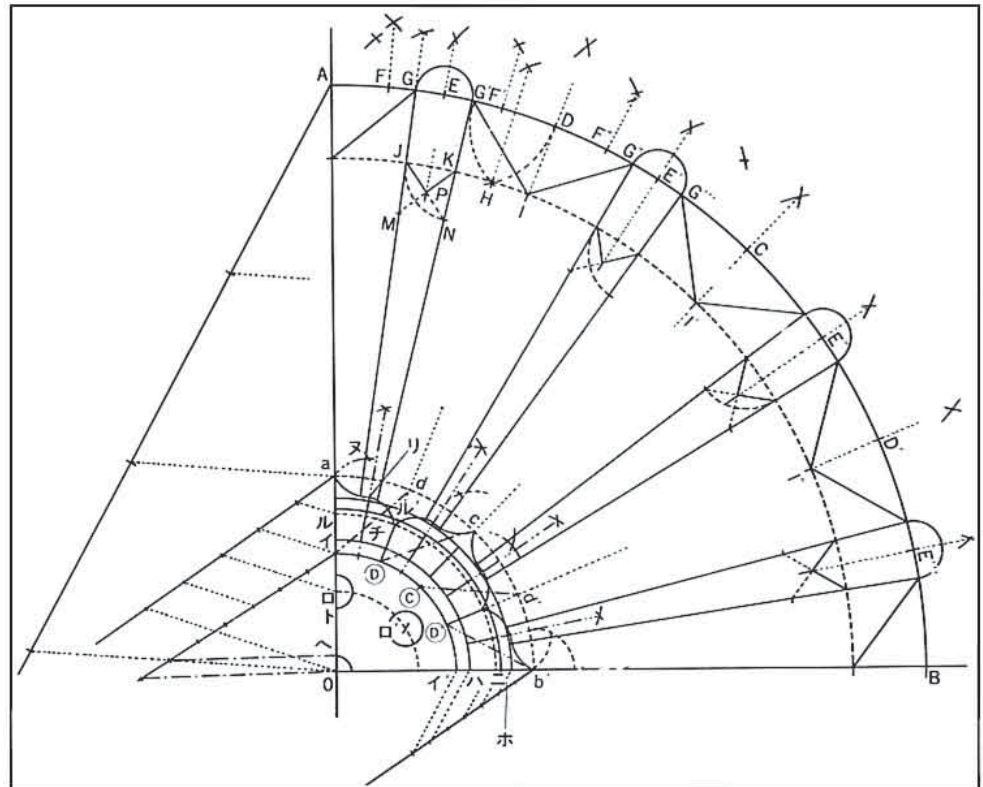


日蓮宗の宗章とその描き方



◀宗章

▼宗章の描き方



①光陰の部分

$\angle AOB = 90^\circ = \angle R$ とする
 $\left. \begin{array}{l} \angle AOC \\ \angle COB \end{array} \right\} = 45^\circ = \frac{\angle R}{2} = \frac{\angle AOB}{2}$
 $\left. \begin{array}{l} \angle AOD \\ \angle DOC \\ \angle COD \end{array} \right\} = 22.5^\circ = \frac{\angle R}{4} = \frac{\angle AOC}{2}$
 $\left. \begin{array}{l} \angle D'OB \\ \angle AOE \\ \angle EOD \\ \angle DOE' \\ \angle E'OC \\ \angle COE' \\ \angle E'OD' \\ \angle D'OE' \\ \angle E'OB \end{array} \right\} = 11.25^\circ = \frac{\angle R}{8} = \frac{\angle AOD}{2}$
 $\left. \begin{array}{l} \angle AOF \\ \angle FOE \\ \angle EOF' \end{array} \right\} = \frac{\angle R}{16} = \frac{\angle AOE}{2}$

$\left. \begin{array}{l} \angle GOE \\ \angle EOG' \\ \angle E'OG' \\ \angle E'OG'' \end{array} \right\} = \frac{\angle R}{32} = \frac{\angle FOE}{2}$

上記のようになるよう点 A ~ G' をとる
 $DG' = DH = G'H$
 $\therefore OH$ を半径とする円弧上に OD との交点を求めこれを I とし G'I G' を結ぶ
 $JK = JM = KN$
 $\therefore JN$ と KM との交点を求め JPK を結ぶ
 同様にして光陰に光る部分を作図する。

②白蓮華の部分

<花卉>
 $aO = \frac{AO}{3}$ 、 $iO = \frac{3aO}{5}$ とし、 $i d$ と OE の交点を $チ$ とし、 $チ$ を中心に $\frac{4aO}{5}$ を半径とする弧と OD との交点を $ル$ とする。

次に、 i を中心に半径 $i l$ の円弧と OE との交点を求める。
 OG 上に $a = リヌ = aヌ$ となる点 $ヌ$ を求め、 $ヌ$ を中心に半径 $aヌ$ の弧 $a'リ$ を作る。
 同様にして花卉を作図する。

<花卉の線と中心部>

中心線... $\frac{4i'b}{7}$
 両脇線... $\frac{3i'b}{7}$ を入れる。
 $\frac{iO}{7} = O$ へを半径とする円を、 O を中心に 1 つ、更に $Oロ$ を中心とした半径 $\frac{2Oa}{5}$ の円弧と AO の交点を $ロ$ を中心に、同一円弧上 60° ごとに $ロ'$ 、 $ロ''$ をとり、それぞれを中心とした半径 $\frac{iO}{7} = O$ への円を計 6 個作図する。

日蓮宗事典

昭和五六年一〇月三日 初版印刷

昭和五六年一〇月一三日 初版発行

編集 日蓮宗事典刊行委員会

発行者 日蓮宗日蓮聖人第七百遠忌報恩奉行委員会

制作 株式会社 東京堂出版

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版製本株式会社

発行所 日蓮宗務院

(〒一四六) 東京都大田区池上一―三三―一五
電話 東京七五一局七一八一

復刻版 日蓮宗事典

平成十一年三月二〇日 初版印刷

平成十一年三月三〇日 初版発行

著作権所有 日蓮宗務院

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 日蓮宗新聞社

一四六〇〇三 東京都大田区池上七―三―三
電話 〇三―三七五五―五二七一
振替 〇〇―一三〇一―〇一五二―一四七

発売 株式会社 東京堂出版

一〇一〇〇五 東京都千代田区神田錦町三―七
電話 〇三―三二二三―三七四一
振替 〇〇―一三〇一―七一―二七〇

本書は昭和五六年一〇月一三日発行の『日蓮宗事典』の復刻版である。

